
リリカルなのは 黒い月の聖王

暴王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 黒い月の聖王

【Nコード】

N2703W

【作者名】

暴王

【あらすじ】

古の影に生まれし虹を纏う失われし王。時を越え無限の欲望を打ち砕かん。

転生者でない聖王と霸王の子供がStrikersの時代に送られる話。ヒロインは一樣キャロの予定なのでエリキャロ好きの人はUターン。いろいろな人の二次創作を見てチャレンジしました。初投稿なのでつまらない可能性大です。タイトルを微妙に変えました。

人物設定（前書き）

一様載せました、随時更新する予定です。

誤字脱字気になる点があつたら教えてください

9 / 2 1 霸王流式式 レグルス 追加。

人物設定

シルバ・ゼーゲブレヒト

容姿

金の首もとまである長髪を後ろで束ねている

現在は指輪で髪を黒くしている

右目が青 左目が緑

イメージはFateのセイバーの目を虹彩異色にして少し幼くした感じ

武装形態時はそのまま成長した姿

バリアジャケットはクラウスの服からマントを無くしたもの

ステータス

魔力値 A A A

魔力光 虹

魔力変換 暴王

レアスキル 聖王の鎧

性格

結構やんちゃでいい加減だが、いざという時はかなり真面目になる
オリヴィエやクラウスをバカにする、もしくは冒涔するようなことがあるとすごくキレル

かなりのカリスマを持ち、いろいろな人を引きつける魅力がある
基本的に誰にでも優しい

オリヴィエやクラウス曰く「優しすぎるが、良き王になる器を持っている」

名前の意味はラテン語で『森』

霸王流

・断空拳

原作と同じ ただし完成版

・旋掌破

原作と同じ ただし砲撃を少し逸らせる

・震天掌

遠距離衝撃破 魔力を混ぜた空気を振動させる

・崩山拳

近距離衝撃破 攻撃した相手を内部にダメージを与える

霸王流式

シルバのオリジナル技、レグルスとのユニゾン時のみ使用可能

・紅蓮拳

レグルスの炎熱変換を利用 炎を纏わせた拳

・獅子紅爆炎拳

レグルスの炎熱変換を利用 獅子の頭の形をした超高密度の炎を纏わせた拳

暴王について

聖王家に稀に生まれる魔力変換

色は漆黒で球体をしている

魔力に反応して動き敵味方関係なく自動的に攻撃する事から『暴れ回る王の力』という意味で暴王

原作に出てくる夜科アゲハのとの違いは非殺生設定が出来る上に特定の相手の魔力だけに反応するようにが出来ること

シルバはまだ使いこなせておらず膨大な魔力が必要なため魔力特定

を使用する余裕がないが…

・暴王の月

シルバの身長ほどある巨大な球体 基本的な形態で最も暴王の特徴が出ている

・暴王の流星

拳サイズの球体 無駄を無くしスピードに重点を置いた形態 そのため追尾が最初の一回のみになった 一番消耗が少ない

・暴王の渦

幾つかの頭サイズの球体をいくつもの輪で繋いで作った防御形態 一番消耗が激しい

・暴王の環

土星の輪に似たものを三つクロスさせた形態 敵を中心に展開した輪を縮めていき最後は敵を切り刻む

デバイス

レグルス

詳細

白い巨大なライオン。魔力消費を抑えるために普段は子猫

歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイス

歴代聖王の知識や記憶を保管する一種の図書館、記憶等を観覧は使用者と逆ユニゾンにより可能

身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にする

単体では炎の咆哮などをあげ攻撃する

人物設定（後書き）

シ「俺の髪って今、黒なんだ。」

暴「目は聖王と霸王の虹彩異色から片方ずつなんだよ。」

シ「なるほど。でレグルスの設定は？」

暴「もちろん…まだだぜ！」

シ「威張るな！」

ブログ（前書き）

短い、かなり短いしかも話進まない。
書いてる皆さんすげー。

俺、日本語あつてるかとても不安。
そんなブログ

プロローグ

時は古代ベルカ

後に最後のゆりかごの聖王となるオリヴィエ・ゼーゲブレヒトは、シュトゥラの霸王家に留学していた。

彼女はそこでクラウス・G・S・イングヴァルトと出会う。

お互いはいつ敵になるか分からない関係、しかし彼らはそんなことを気にせずに親しくなった。

留学してから暫く後にとある出来事が起きた。

共に武道家として接していたはずだった…。

お互い友だと思っていた…。

しかし、彼らは決して起こしてはいけない『間違い』を犯してしまった。

オリヴィエは子供を身ごもった。

お互いの家は共に生むことを許さなかった。

しかし、彼女は…二人は子供を生むことを選択した。

本来なら居るはずのない者。

聖王と霸王の血を継ぎし者…

彼の者の名は

シルバ・ゼーゲブレヒト。

・
・
・
・

すやすやと眠っている赤ん坊のを優しい目で見ながら二人の男女が話し合っていた。

「この子を安全の為にはなるべく見つかり難くて平和な場所で育てるべきでしょうね。」

「僕もそれに同感だ。」

シュトゥラの辺境の森の中に、僕の信頼の置ける人が治めている小さい村がある。そこに隠して育てよう。」

「なら私の顔見知りも居た方がいいわね。友人にそこで教育役と護衛を引き受けて貰うように頼んでみるわ。彼女なら安心して任せられるし。」

赤ん坊の頬を撫でながら返事をするオリヴィエに対し、クラウスはふと質問する。

「側近とか言わないよね？」

「もちろん言うわよ。」

「……なるべく僕たちの子供だとバレない方がいいんだけど。」

「いやよ。ママって呼んでほしいし。」

「……………」

クラウスの思考は一瞬停止するが、すぐに復活し質問する。

「そんな理由でバラすつもり？」

「冗談よ？」

オリヴィエはそっぽを向きながら答えた後、真面目な顔をしてクラウスを見据えて話し始める。

「真面目な話、例えばこの子に秘密にしていた所で、この子を襲う危険性は無くなるわけじゃないでしょう？」

この金色の髪に今まで存在しない組み合わせの虹彩異色、そして極めつけは虹色の魔力光。

これだけ揃っていれば分かる人には分かる。そうなった時にこの子が自分の親の事を…私たちの事を知っているか、知らないかでは危険度が全然違うわ。」

「確かに、この子は何処で過ごすにしてもかなりの危険が伴うね…
…決めた！この子には霸王流を教えよう！」

「私もなるべく顔を出しているんな事を教えるつもりよ。」

「よし。じゃあ今後の方向も決まった事だし村の方に連絡を取ってくるよ。」

そう言ってクラウドは走るように部屋を後にした。

部屋に残ったオリヴィエは、赤ん坊……シルバを優しくなでながら我が子の未来について考えるのだった。

プロローグ（後書き）

なんかホント皆さんすみません。
訂正とかあったらお願いします。

家族（前書き）

初戦闘……難しい

オリヴィエのキャラがおかしいですorz

家族

シュトウラ辺境の小さな村

頭に子猫を乗せた金髪の少年はうろろ歩き回りながら、金髪の女性
性は静に立ち村の入り口で誰かを待っていた。

「シルバ様、陛下達がいらっしゃるのは一時間後の予定なんですが
……」

女性…アリス・グラシアが、シルバに文句を言う。

「待ちきれないの！」

二人が一緒に来るんだよ！三人で会えるのなんて誕生日以外無かつ
たんだよ？」

「確かにそうですが……もう12歳でしょ？少しは落ち着いて下さ
い。」

「分かりましたよ。でも何で突然二人一緒に会いに来るんだろ
…やっぱり激化してる戦争関連かな？」

「多分そうだと思いますが…」

「もりかして聖王家と覇王家が対立したとか！？」

「其れはないと思いますよ。一樣同盟国ですし…」

「じゃあ、俺に参戦しろとか？」

「其れこそありえませんよ。隠し子なんですから。

それと一人称は『俺』ではなく『私』にして下さい。」

「まあだからこの村にいるんだし。」

一人称はもう癖になっちゃてるから無理だと思うよ。」

「何で他人事なんですか…」

《Gaoooooo》

二人が話をしていると突然子猫…レグルスがシルバの頭から飛び降
り吠えた。

「陛下たちが来たみたいですね。」

「うん。何だかんだ言って二人も早く来たみたいだし丁度良かった

じゃん。」

「いや一時間半もここに居たんですから丁度良いも何も無いと思うんですが…」

「いちいちうるさい！こう言うのは気分の問題なの！」

二人がどうでも良いことで揉めている内に、いつの間にか二人の男女が二人のそばまで来ていが二人は気付いていない。

「だいたい、口調もそうだし何で一々畏まらなきゃいけないのさ！」

「だから幾ら隠し子でも王の血を引いているんですからその自覚を持って下さいと何度も…「ストープ！」！」

言い争いが終わらないと思ったクラウドが仲裁に入る。

「オリヴィエ陛下、クラウド陛下何時の間に…」

「貴方たちが揉めてる間によ。」

「父上！母上！」

「だから私のことは昔のようにママと呼んでは言ってるでしょ？」

「アリスに母上って呼びなさいって言われたけど？」

「ちよっシルバ様！何言ってるん「ふん」。どう言うことアリス？」

！？

アリスのシルバの発言に対し抗議しようとするが、虹色のオーラを纏った修羅の気配に最後まで言葉が続かなかった。

「いえ、あのですね…王の血を継ぐ者としての威厳とかを考えまして…その方がいいと思っただけです。はい。」

「ちよっ、OHANASIしよっか。」

「今なんか発音がおかしかったような…って襟首引つ張らないで下さい！シルバ様も笑ってないで助けて下さいよ！」

アリスはそのままオリヴィエに連れて行かれ見えなくなった。

「……父上、突然二人で来るなんてどうかしたんですか？」

シルバは笑いすぎて腹を押さえながら気になっていたことを聞く。

「ああ、これからのことで重要な話があるんだ。」

オリヴィエが戻って来たら話すよ。

…とりあえずまだしばらくかかると思うから、久しぶりに霸王流の

稽古をつけてあげようか？」

「ホント！じゃあ早く広場に行こ！」

・
・
・
・
・

「こっちはもう準備できたよ。何時でもどうぞ。」

「では、武装形態！」

光がシルバを包み、次の瞬間成長したシルバがその場に立っていた。
「行きます！」

そう言うときシルバは一瞬で距離を詰め左腕を下からクラウドスに向け振り上げる。

それをクラウドスは右手を添えるように受け止める。

それを予想していたシルバはそのまま左拳に体重を乗せるように力を入れて無理矢理振り抜く。

クラウドスは足に力を入れその場に踏みとどまり左拳をシルバの原に向け突き出す。

「霸王断空拳！」

シルバはそれを腹に力を入れわざと食らい、その力を利用して上に跳び、クラウドスの背中に降り立ちそのまま振り向きざまに右手で裏拳を打ち出す。

クラウドスはしゃがみながら振り返り裏拳をかわし攻撃に移る。

猛攻を受け後ろに下がり距離を開けたシルバに対し、クラウドスは声をかける。

「今のは良かったぞ、シルバ。一瞬食らうかと思ったよ。」

「そう言いながら、かなり余裕そうでしたけど…？」

シルバは返事をしながら再び近づく。

クラウドスがそれに対してカウンターを入れようとした瞬間、シルバは特殊なステップを踏み再び後ろを取り、右拳を打ち出す。

「！！」

「霸王断空拳！」

今度はシルバが断空拳を放つ。

その拳はそのままクラウスに直撃する。

決まった！とシルバが思った瞬間クラウスの拳がシルバの肩に突き

刺さり、シルバは回転しながら吹き飛んだ。

「いつもよりかなり早く一本取れたね。」

「一本取れたのは嬉しいけど痛い。かなり痛い。」

「技が決まったからって、すぐ気を抜くからだよ。」

これからは決まった後も気を抜いちゃ駄目だよ。」

「はい。」

いつの間にか試合を見ていたオリヴィエとアリスが近づいてくる。

「終わったみたいね。」

シルバ、かなり強くなったね。」

そう言いながらシルバを抱きしめるが…

「痛い！母上肩が！」

その行為がシルバの怪我を悪化させてしまう事になった。

・
・
・
・
・

その翌朝、シルバ達はイスに座ってオリヴィエ達が訪ねた理由を聞いていた。

「では、やはりここに来たのは戦争の激化が理由ですか…」

「正確にはそれが理由の重要な話があるからよ。」

「重要な話？」

「ええ、私達からのお願い。」

シルバにこの戦争に巻き込まれない場所に逃げて欲しいの。」

「…別の世界ですか？」

「
いいえ。」

……別の『時代』よ

家族（後書き）

続くって感じで

誤字脱字気になる点があったら教えてください

別れそして未来へ（前書き）

今回ちょっとだけPSYRENが…
にしてもいつも短いorz

別れそして未来へ

「別の時代ですか？」

「ああ、別の時代だ。」

シルバの呟きにクラウスが答える。

「ちよつと待つて下さい陛下！」

そんな事の出来る魔法聞いたこと有りません！
どうやって……」

「もうちよつと静かに話して。」

悲鳴に近い声で話すアリスをオリヴィエが遮る。

「あ、はい………って、これが叫ばすにいられますか！どうやって送るんですか！？」

「それは俺も気になります。説得より先にそれを説明して下さい。」
「分かったわ……これを使うのよ。」

そう言つてオリヴィエは布に包まれていた、角のある白い仮面のよ
うな物を取り出す。

「それは？」

「【時の旅人】、忘れられし都の秘宝。」

「！？」

「忘れられし都……？」

どこかで聞いたような……？」

「アルハザードの事だよ。」

唸っているシルバにクラウスが教える。

「ああ、あの伝説の………伝説の！？」

「【ゆりがご】と並ぶ約束の地の遺産よ。」

「………方法は分かりました。」

「じゃあ、貴方を送る理由を言うわね。」

「はい。」

「私たちはね、シルバに生きて欲しいの。」

いろんな所に行つて、いろんな物を見て、いろんな事をして、自由に生きて欲しい。

でもどうせなら、この時代の誰も知らない世界、未来の世界に生きて欲しい。

これは私達からのお願い。私達がシルバにして欲しいことなの。」
オリヴィエ達はシルバの瞳を見つめながら話す。

「お前は強くなった。もう自分を守ることが出来るほど。」

「俺はまだ父上にも母上にも一回も勝つてない！」

それに力も…、『暴王』も完全には使いこなせてない！」

「当たり前だよ、そんなに僕達は弱くない。」

その僕から一本取つたんだ。誇つて良い。

暴王だつて、もう暴走しなくなつたじゃないか。頼む…分かつてくれシルバ。」

「そんなの二人の我が侘だ！俺はみんなで居られればいい！」

「…正直ね、この戦争で私達が死んでしまうかもしれないの。我が侘でも良い。言うことを聞いて。このとおりよ。」

おもむろに立ち上がると二人はシルバに頭を下げた。

「…頭を上げて。そこまでされたら…もう断れないよ…」

シルバは泣きながら言う。

「ありがとう、シルバ。」

「でもこれだけは…聞いて欲しい。」

「何んだい？」

「一週間だけ一緒にいて…お願い。」

それを聞いたオリヴィエはシルバを抱き寄せて言った。

「もちろん、私達もそのつもりよ。」

・
・
・
・
・

一週間後、村の人達に挨拶を終え四人は村の外にある森中にいた。

「一樣、着いてからも正体はなるべくバレないようにね。」

「その仮面は使い捨てだから時渡りが終わると碎けるわ。」

「レグルスの管理は私の一族が代々引き受けますので、私の子孫を捜して下さい。」

「それとシルバ、これを」

「これは？」

「付けている間、髪の色を変色させる指輪だ。」

「ありがとうございます。」

そう言々とシルバは指輪を付けてから三人と向かい合った。

そして誰とも無く全員同時に、こう言った。

「『『『元気だね。』』』」

別れそして未来へ（後書き）

後2話ぐらいで本編は入れるといいな（人事↑オイ
次はキャラが出る予定。

誤字脱字気になる点があったら教えてください

到着（前書き）

ようやく原作キャラ登場

PSI発動！！

設定は後日載せる予定です。

到着

「……元気でね。」「……」

そう言い仮面を付けた瞬間、シルバは無重力状態にあるような感覚を感じ、そのまま気を失った。

・
・
・
・
・

シルバが目覚めて最初に感じたのは、激しい風と強い重力だった。そして目を開いて彼は驚愕した。

「何で空中なんだよ!？」

シルバの遙か下に海が見える。町中で無かったただけまだあったが、それでも海面に叩きつけられれば即死は確実な高さだった。

「身体強化で乗り切るは無理か…武装形態!全魔力『聖王の鎧』に集中!ついでに!」

「暴王の渦」

虹色のオーラを纏い、さらに黒い球体が、無数の環で繋がれて出来たドームが現れる。

そして…

「ウオオオオオオオオオ!」

「ドゴオオオン」

辺りに爆発音が響いた。

・
・
・
・
・

side キヤロ

ドゴオオン、

「ひゃう!？」

「キユクウ!？」

機動六課に来てばかりだった私とフリードは、訓練終了後に六課の敷地内を見て回っていたのだけど…

「すごい爆発音…訓練所の方からだ。

見に行こ、フリード。」

「キユクウ」

フリードの返事を聞くと私は走り出した。

side out

side はやて

「何事や!？」

必要な書類の整理が終わり一息着いた時に、いきなり大きな爆発音が聞こえ直ぐにロングアーチに走り込んだ。

「訓練所付近の海上にロストログアの反応を確認、その後直ぐに消滅。」

「爆発の方は？」

「それについては現在不明です。どうしますか？」

「とりあえず、シグナムとヴィータに調査してもらい。」

「隊長達は？」

「待機や。」

「了解です。」

頼むで二人とも…

side out

side キャロ

訓練所の端に着いた私は辺りを見渡していた。

「フリードなんか見える？」

「キユクウ…」

申し訳なさそうにフリードが返事をする。

「そっか…？あれ？」

ふと岸に何かが流れ着いているのが目に映った。

「あれって…もしかして人！？」

私は急いでその人に走り寄った。

「大丈夫ですか！？って、この男の子意識がない！？どうしよう！？」

「キユクウ！」

「取り敢えずみんなに連絡しなきゃ！」

side out

「八神部隊長！ライトニング04からの通信です。」

「キャロから？」

「八神部隊長！今訓練所に男の子が流れ着いていて！意識がないんです！」

かなりパニックを起こした様子でキャロが言った。

「！？男の子！？よし、直ぐシャルマルに行かせるからそこから動かんといてや！」

「はい！」

「シャルマル、聞いたっとな？」

「はい。直ぐに向かいます。」

一連の会話を終えはやては、ゆっくりイスに座る。

「八神部隊長…たぶんその男の子が…」

「了解です。」

「あれ……どこ何処？」

「えつと確か…みんなと別れて…気付いたら空中で…それでここがどこか知らないが…助かったって事でいいのかな…？」

「んっすう」

何気なく隣を見ると……ピンクの髪をした女の子が寝ていた……一緒に布団で。

「いつてええええええ！」

到着（後書き）

はやての口調が難しい……
誤字脱字気になる点があったら教えてください

出会い（前書き）

キャラとの初絡み…

誤字脱字気になる点があったら教えてください

出会い

side シルバ

「ごめんなさい！」

俺は今、顔を真っ赤にしたピンクの髪の女の子に謝られている。

「いや、もう大丈夫だよ。」

これは俺が勝手に驚いて作った怪我なんだから。」

「でも…」

「それに俺の心配してくれてたんでしょ？」

「そうなんですけど…」

どうやら、岸に流れ着いたおれをこの子が見つけたらしい。

そして冷たい海水で熱を出した俺を隣で看病していたら、いつの間にか寝ぼけて俺が寝ていた布団に入ってしまったらしい。

「それより君の名前は？」

このままでは無限ループに入りそうだったので、話を変える。

「あっ自己紹介がまだでしたね。」

私は時空管理局 機動六課キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。」

「時空間離国？機動六課？砂糖陸士？」

なんだそれ…どこの国だ？聞いたこと無いぞ…

「えっと…時空間離国じゃなくて時空管理局です。あと砂糖じゃなくて三等です。」

にしても時空管理局を知らないんなら管理外世界からの次元漂流者

でしょうか…」

わくさっぱり分かんない！

「ごめん…最後の方、言ってる事が全然分らないんだけど…」

「あつすいません、気にしないで下さい。」

まあそう言うなら良いか…あつ

「俺の名前を覚えてなかったね。俺は…」

ちよっと待てよ。

確か分かれる前に正体なるべくバラすなって言われたな…

「どうしたんですか？」

「えっ何でもないよ。」

俺の名前はシルバ。よろしく。」

「はい！よろしくお願いします！」

騙してるみたいで悪いななんか…

「ガチャ」

「もう起きとつたんか。」

side out

side はやて

昨日の少年の元に行こうとしたら、病室から話し声が聞こえてきた。

「ガチャ」

「もう起きとつたんか。」

「八神部隊長！おはようございます！」

「おはようさん、キャロ。」

少年と話したんはキャロか…これは面白い話題になりそうや…

つと、いかんいかん、今はこの少年に話を聞くのが先やな。

side out

「初めまして。」

うちは、時空管理局 機動六課 部隊長の八神はやてや。よろしゅうな。」

「俺はシルバです。よろしくお願いします。」

「早速やけどシルバ君に聞きたいことがあるんやけど…」

「あの私席外しますね。」

「ありがとう、キャロ。」

キャロが病室を出るとシルバが先にしゃべり出す。

「すいません、先に俺が質問して良いですか？

なるべく早く会いたい人が居るんです。」

「了解、で誰や？」

「アリス・グラシアさんの家系の人です。」

グラシアと聞いてはやての頭に一人の女性が浮かぶ。

「アリスさんの家系かは知らんけど、グラシアは一人知り合いに居るで。」

「ホントですか！」

「ホンマや。今連絡取ってみるは。」

そう言うとはやての前にモニターが出てきた。

「どうかしましたか？騎士はやて。」

モニターに短い髪の女性が写る。

「すんまんけど、カリムいるか？」

「はい。今、代わります。」

そう言うとはやては金髪の女性が写る。

「どうかしたの、はやて？」

「それが…アリス・グラシアの家系の人に会いた…なんですって！？その人、今其処に居ますか！？」

「うん…居るで。代わるか？」

突然のカリムの気迫に圧されながら、はやてが答える。

「お願い。」

「えっと…あなたが？」

シルバはモニターに写るアリスそっくりの人物に質問する。

「はい…アリス・グラシア直系の子孫、カリム・グラシアと申します。」

お会いできて光栄です。

……聖王陛下。」

「はい？今何って言ったんや！？」

はやては目を点にして聞き返す。

「はやてになら言っても良いでしょう…よろしいですか？陛下。」

「信用できる人なら。」

「では…そこにいらっしゃるのは、聖王女オリヴィエ陛下の隠し子…シルバ・ゼーゲブレヒト様です。」

「……………なんやってー！？」

機動六課にはやての絶叫が響きわたった。

出会い（後書き）

シ「シルバと」

キ「キャラの」

二人「「言わせて見ようあの名言」」

シ「このコーナーは作者が他の方々の前書きや、後書きに感化せられ突然やり始めた訳のわからない馬鹿で自己満足な駄文です。」

キ「シルバ君毒舌すぎだよ…他の作品の名言をリリなのキャラに読んでもらうコーナーです。」

記念すべき第一回は原作主人公のなのはさんです。」

な「よろしくね、二人とも。」

シ「てか、俺まだ本文で会ってないんだけど…」

キ「気にしちゃダメだよ、シルバ君。」

シ「今回の場面は…こちら」

無印編 サッカーの試合後のジュエルシード暴走時に

キ「では、なのはさんお願いします

な「ひとつ、私はジュエルシードの危険性を理解出来ていなかった。

ふたつ、回収する決断が一瞬鈍った。

みつつ、そのせいで町を泣かせた。

私は自分の罪を数えたよ。さあ、お前の罪を数えろ！」

キ「これは彼の有名な風都の初代仮面騎士であるハードボイルドのセリフですね。」

シ「…これ、なのはさんのキャラじゃ無くない？」

な「私もそれに同感したいな。」

全員「「それではまた次回を会いしましょう。」」」

聖王教会にて（前書き）

レリックについてオリ設定があります。

話し合わなくなったらどうするんだろ…

誤字脱字気になる点があったら教えてください

聖王教会にて

side はやて

私は今、聖王教会の一室にてカリムと聖王陛下？に彼がここに居る理由を説明をして貰っていた。

「聖王陛下？がこの時代に来たにそんな理由が有るとな？」

「その『聖王陛下？』ってのいいかげんやめてくれない？シルバで良いよ。」

「ほな、シルバ君って呼ばせて貰うな？」

聖王陛下？に了解を貰う…って冗談やから睨まんという！

それより何で心ん中読まれたんやろ？

「顔に出てたぞ。」

なんやってー！

side out

「はやてに説明し終わりましたし…」

そろそろ陛下に現在はやてに請けて貰っている依頼を説明させてもらいたいのですが…」

「ちょい待ちいカリム！

その話してええんか？」

「ええ…元々『あれ』は聖王家の物だから、許可をいただかないといけないわ。」

それに聖王教会は聖王に仕えてこそでしょう？

はやては納得いかない？」

「確かにそうやけど…いや、カリムがそう言うならうちは何も言わん。」

「ありがとう、はやて。」

そう言つとカリムはシルバに向き直る。

「陛下、現在私達はロストロギアと呼ばれる物の内に含まれる聖王家のある遺産を回収しています。」

「ロストロギア？」

「はい。崩壊した世界や文明の持っていた力の塊を示す言葉です。」

「ふん…大体分かった。」

さつき聖王家のある遺産つて言っていたが、何を回収しているんだ？

「【レリック】です。」

「なるほど…たしかに確認なしで回収して良いもんじゃないな、それは。」

「私が現在はやての六課に回収するよう依頼したのには理由があります。」

そう言つとカリムは何かを撫でるように右手を振る。

すると幾つものウインドウが空中に現れる。

「数年前から、何者かがレリックを回収しているのです。」

「なに…？」

カリムの言葉にシルバは飲もうとしていた紅茶を直ぐに降ろす。

「さらにレリックが発見された場所などで高エネルギー研究施設の跡などがあり……」

「ガシャン」

二人が音のした方を見るとシルバが持っていたコップを握りつぶしていた。

「…何処の誰だか知らんが…いい度胸だ…」

決めた、俺をその六課とやらに入れる。」

「…はい？」

二人はシルバの言葉に思わず間抜けな声を出す。

「だから俺を六課に加える。」

レリックを利用しての奴は俺がを叩き潰す！」

「しっ、しかし危険すぎます！」

「…カリム、レリックの正体って知っているか？」

「いえ…そこまでは…」

「なら教えてやるよ。」

聖王ってのはな自らの「鎧」の出力を上げるためにとある力の結晶であるレリックを取り込むんだ。

レリックを取り込んだものが死ぬと、取り込まれた力と取り込んだ者の力…二つの力の結晶が生まれる、それがレリックだ。」

「そっ…それではレリックというのは…」

「歴代聖王の遺体だ。」

「なるほどな…うちはええよ。先祖の遺体を利用されたら…うちも同じ事言うと思うしな。」

「はやて…分かりました。」

では聖王協会から派遣する査察官と言うことにしましょう。

陛下、貴方が聖王であることはバラさないで下さい。」

「ああ、分かってる。ありがとう。」

「それとシルバ様にお返しするものがあります。付いてきて下さい。」

「

そう言つとカリムは立ち上がり歩き出した。

side シルバ

カリムに連れてこられ、第8資料保管庫と書かれた扉の前に着いた。

「少しお待ち下さい。」

カリムはそう言つと扉の横にある、変な機械にカードを通した。

「ガチャン」

鍵が外れ扉が開く。

中にはいると直径1メートルほどの巨大な水晶が置いてあった。

間違いない『あいつ』だ。少し興奮しながら水晶に手を当て名前を呼ぶ。

「おいで！レグルス！」

《GAOOOOOO!!》

side out

シルバが名前を呼んだ瞬間、激しい光と巨大な雄叫びが上がる。

「眩し、何なんや！」

少しし光が止むとそこには綺麗な鬣を生やした巨大な白い獅子がいた。

《GAOOOOOO!!》

獅子はシルバの前に行き頭を下げてから再び遠吠えを上げる。

まるで王を帰還を祝福するかのように…

聖王教会にて（後書き）

キ「前回に引き続き今回もなのはさんです。」

シ「え？まだやってたのこれ？」

キ「まだものも今回で第二回だよ！？」

な「こんなの書いてないで早く本編進めればいいのに……」

キ「はは……今回の場面はこちら」

無印編 ジュエルシードをかけた最終決戦でフェイトに向けてSL
Bを放つ時

な「さよなら……フェイトちゃん。多分初恋だった……」

キ「……これは、某『王の力』を持つ99代皇帝陛下のセリフですね

……」

二人「……」

シ「やっぱり二人って、そんな関係だったんですね……」

キ「しかもまだ九歳ですよ、この時。」

な「違う！そうじゃ無いの！そういうセリフなの！」

シ「大丈夫ですって。誰にも言わないですから……多分」

な「多分！？それに早速はやてちゃんに連絡しようとしてるの！？」

二人「……それではまた次回を会いましょう」

な「話を聞いて……！（涙目）」

六課への配属（前書き）

レグルスはまだ謎のあるデバイスです。

しかし原作の入らない…どうすんだ？

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

六課への配属

「で、このライオンさんは何なんや？」

第8資料保管庫から、先ほどの応接間に戻り、再び席に着くとはやてがシルバに尋ねた。

「こいつはレグルスって言うんだが…詳しいことは知らん！」
ガタン

シルバの発言にはやては椅子から落ちた。

「なんでやねん！おかしいやろ！あんたのライオンさんとちゃうんかい！？」

「ああ、八歳の時に母上達に貰った。」

「なら何で知らんのや！」

「ストップ！私を知っていることを説明するから。」

ヒートアップして来たはやてを、カリムが治めながら言う。

「レグルスは歴代の聖王正当後継者が従えるアニマル型ユニゾンデバイスなの。」

彼は歴代聖王の知識や記憶を保管する一種の図書館の様なものであると同時に、ユニゾン時に身体能力を上げ、魔力の炎熱変換を可能にするもののなの。

あとは、反乱に対する絶対的な抑止力とも言えられているわ。」

「反乱に対する抑止力？どういう意味や？」

はやては自分の疑問を口にする。

「そこまでは分からないわ。」

「そうかあ…」

はやてが呟く

「それと継承だけど、先代が譲り渡さないといけないうえに、継承された時点で赤ちゃんに戻るらしいのよ。」

「そう言えば別れた時はまだ子猫だったな…」

シルバが思い出したように呟く。

「……」

この天然な発言には流石のカリムも啞然とする。

「とにかく、このライオンさん…レグルスはシルバ君のデバイスと言っことでええんやな？」

はやてが無理矢理にも話を進めようとするが…

「なあ、子猫サイズになること出来るか？」

《GAU》

「おおゝ子猫になった！スゴいぞ！」

《GAUGAU》

シルバとレグルスは完全に無視である。

「待ちなさい！はやて！」

「止めんといてカリム！一発殴らんと気がすまん！」

それを見て殴りかかろうとしたはやてをカリムが羽交い締めにする。その奥でシルバがレグルス（子猫）と戯れていた。

暫くして場が収まり、話が元に戻る。

「では、聖王教会 教会騎士団騎士シルバ・メルゼーを機動六課に正式に派遣したいと思います。」

カリムがシルバとはやてを見ながら宣言する

「謹んでお受けします。」

シルバはそれを了承し…

「機動六課、了解いたしました。」

はやても書類を受理した。

side シルバ

聖王教会での話し合いの後、俺は直ぐに機動六課に連れて来られた。

「と言うわけで、この子が聖王教会から派遣されたシルバ君や！」
現在は、六課のみなさんと顔合わせ中だ。

「えゝ、聖王教会の騎士シルバ・ゼツゝメルゼー、頭の上に乗っているのはレグルスだ！よろしく！」

危なゝ、今ゼーゲブレヒトって言いそうになったぞ。

「ゼメルゼー？」

「違う！メルゼーだ！」

「よろしくゝ」

六課のみんなが返事をしてくれた。

「クイツクイツ」

「うん？」

食べ物を摘んでいると、服を引つ張られたのでそちらを見る。

そこには今朝の女の子ゝキャロちゃんが居た。

「シルバ君も六課に入る事になったんだね。

でも、何で時空管理局の事を知らなかったの？」

これはマズいゝなんか良い言い訳をゝ

「シルバ君の保護者の人ゝカリムって言うんやけどな、その人が危ない目に遭って欲しくないからって内緒にしてたらしいんや。」

はやて、ナイス！

「そうだったんですかゝ」

「まあ、年も近いんやから、仲良うしたってや。」

「はい！分かりました！」

おおゝなんか上手く丸め込んだ。今、初めてはやてに感謝したぞ。

「何か失礼なこと考えてへんか？」

「ゝ」

以外と鋭いな。

「おい！メルゼーと言ったな。」

突然、後ろから声をかけられた。

side out

s i d e シグナム

あのシルバ・メルゼーという者…かなりの手練れだな…

それにしても、レグルス…どこかで聞いた名だが…まあ今は置いておきましょう。取り敢えず今は戦ってみたい！

「おい！メルゼーと言ったな。」

メルゼーがこちらを向き返事をする。

「そうだけど？」

よし！

「私と勝負しろ！」

六課への配属（後書き）

キャラ「あれ？名前の表示が変わってる…」

シルバ「作者がようやく頭文字だけじゃシルバ、シグナム、シャマルがかぶる事に気づいたんだよ。」

キャラ「その作者は？」

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

キャラ「これどうしたの？」

シルバ「前回終わった後になのはさんとOHANASHIらしい。」

キャラ「なるほど…じゃあ、もう名言コーナーは無かな？」

まだあきらめた訳じゃ無い！！

シルバ「突然復活したな…」

という訳でこれ読んで。

二人「がんばれ作者！！みんな応援してるぞ！！」

よし！がんばる！

シルバ「茶番だあああ！作者あああ！」

キャラ「あつ、名言だ。」

今回の名言「茶番だあああ！」

剣の騎士との模擬戦（前書き）

先日本屋でハイレベル力学りきがくをハイベル力学ベルかがくと読んでかなりびっくりしました。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

剣の騎士との模擬戦

「はい？」

シルバが思わずアホな声を上げる。

「だから模擬戦をしないか、と言っているのだ？」

「それは分かる。」

俺が聞きたいのは、何故会って早々に戦わなければならなのか、と言うことだ。」

「理由は簡単だ。同じ『騎士』が仲間になったのだ、挨拶代わりに…と言った感じだ。」

シグナムの発言にその場にいる全員の心の声が一つになった。

（（どんな挨拶だ！！））

「なるほどよく分からんが、そう言う挨拶もあるのか…」

（（そんなもんあるか！！））

シルバの勘違いした呟きにまたしても心の中で全員が突っ込んだ。

「良いだろう。何処でやるんだ？」

「訓練所だ。着いてこい。」

そう言って二人は去っていった。

「…シルバ君がどんな感じで戦うのか気になるし、私達も行くのか。」

「なのはの提案によって全員で模擬戦を見ることになった。」

side シルバ

カリムに、なるべくバレるなって言われたが…魔力光はレグルスの使うとして、霸王流は…そのとき次第だな。

「もうすぐ着くぞ。」

相手の騎士に言われ考え事を中止する。

「あれはアニマル型ユニゾンデバイスっちゅうやつらしいで。」
はやてが説明する。

「でも動物型のユニゾンデバイスなんて聞いたこと無いよ？」
なのはが質問する。

「まあ、うちも聞いたこと無かったしな。そやから、レグルスが始めてや。」

「動物型のデバイス…解析してみたい！」
メカニククのシャーリーが興奮気味に言う。

「止めといた方がいいで…無闇に触ろうとすると噛まれるで。」
はやては若干疲れた顔をしながら言う。

「大丈夫ですよ！だって子猫じゃないですが。」

「…あれは魔力の消費を押さえるためなんや。」
実際は大きくて白いライオンやで…」

「またまたそんな冗談を♪」

模擬戦終わったら頼んでみよつと。」

はやての言葉を冗談と受け取ったシャーリーはどうやって解析させて貰おうかを考え始めた。

シルバの準備が終わると二人は同時に前に出た。

接近と同時にシグナムが剣を振り、シルバはそれを左手の甲で上に受け流すと同時に腹に向け右拳を放つ。

「あまい！」

しかしそれを予想していたシグナムに簡単に避けられてしまう。
そのまま受け流された剣を上から振り下ろす。

今度は受け流さず、右足を軸にからだを回転させ、わき腹に向け左蹴りを放つ。

「吹き飛ばし！」

「グッ」

蹴りをわき腹にモロに受け、シグナムが吹き飛ぶ。

「やはり強いな…今のは効いたぞ。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「ならもうちょっと苦しそうにして欲しいな。」

そう文句を言うシルバにも笑みが浮かんでいる。

「久々の決闘で調子が漸く出てきたのでな…」

「段々ユニゾンに慣れて来た事だし…」

「これからが本番だ!!」

再びお互いに接近し高速で打ち合う。

拳を剣の腹で。打ち下ろしを腕で。蹴りを鞘で。横風を掌で。

弾く。逸らす。防ぐ。受ける。

しばらく激しい攻防を繰り広げ、埒が明かないと悟り、同時にお互い一步下がる。

シルバは拳を、シグナムは剣を、突き出す。

「紫電一閃!」

シグナムはカートリッジを使い、魔力変換の炎を纏わせ威力を高めた剣撃を。

「貳式 紅蓮拳!」

シルバはレグルスの力を使い、魔力変換で炎を作り出力を上げた拳撃を。

「ウオオオオツ!!」

それぞれ渾身の力で打ち出す。

しばらく力は均衡したが、お互いの炎が混ざり合い大爆発を起こす。煙が立ちこめ何も見えない状態におちいる。

そして二つの影が確認出来たと同時に片方が走り出し…

「貳式 獅子紅爆炎拳!」

煙を吹き飛ばしながら、全魔力で作った獅子の頭の形をした炎を拳に纏わせ放つが…

《シュランゲフォーム!》

蛇腹形態になったレヴァンティンのカウンターを受けシルバは気絶させられてしまった。

剣の騎士との模擬戦（後書き）

なのは「ターゲットスコップ、オープン 電影クロスゲージ明度20 エネルギー充填120% 対 ショック、 対閃光防御

キャラ「作者が実写版を見ようと借りてきたからこのネタらしいんだけど…これじゃ、魔砲少女どころか波動砲少女だよ…」

シルバ「……」

キャラ「シルバ君は負けたショックで話さないし…」

シルバ「……」

キャラ「作者も疲れたらしいので今回はこれで、」

キャラ「それではまた次回を会いしましょう！」

シルバ「……」

キャラ「って挨拶ぐらいしてよー！」

みんなで生きる時代（前書き）

今回はいつもに増して分かりにくいです。すみません。
模擬戦後の話と質問タイムです。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

みんなで生きる時代

side シルバ

ゆつくりと意識が浮上していく。

疲れ切り重い目蓋を開けると天井が見えた。

「おっ、目覚めたんか？」

「はやて、か…」

「まさか、シグナムとあそこまでやり合うと思わんかったわ。」

「けど、負けた…」

「それでもその年であれなら強いやろ。」

この時代ならそうかも知れないが…

「俺の時代では生き残れない…」

無意識のうちに手を堅く握っていた。

「…ちがうで、シルバ君。」

はやての言葉で頭に血が上る。

「何故そう言いきれぬ！俺の時代を知らない…貴様に何が分かる！」

「そうやな。うちはシルバ君が生まれた時代を知らん。」

けどな、今はここで生きているなら、ここがシルバ君の時代やで。」

「な…に？」

「シルバ君は確かに古代ベルカから来たかも知れん。そやけど今はこの時代で生きている。そやからここがシルバ君の時代や。」

「ここが俺の…時代…」

「そうや、一人で生きられへんのやら仲間に支えて貰う。それがこの時代や。」

うちも昔は一人で苦しみながら生きていた。あのままやったら…死んでもうたかも知れん。

けどな、家族や友達が出来て、みんなに…仲間に支えて貰って生きてるんや。」

仲間に支えて貰う…か。

はやては強いな…

「もう大丈夫そうやな。」

「ああ、落ち着いた。」

「そっか…ほな行くで。」

「そうだな行くか…ん？」

「行く？何処にだ？」

「何だかやな予感がする。」

「みんなの質問タイムや！」

はやての事、少し認めてやろうと思ったけど止めた。

はやてに連れられて入った部屋は、ちょっとした休憩室の様な所だった。

「ほな、みんなの気になつとる事どんどん聞いてや。」

はやてがまるで自分が答える…みたいに言った。

「はい！私から質問して良いですか？」

「ええよ」

はやてが勝手に許可する。

「何故、貴様が決めてんだ…で何？えつと…」

青い短髪の少女に向き直る…ん？何か引つかかるなこの子。

「スバル・ナカジマです！」

「スバル…ね。俺のことはシルバで良いよ。あと丁寧語は止めて。

俺の方が年下だし。」

「じゃあ、シルバって呼ぶね。」

さつき使ってたのって、ストライク・アーツじゃ無いよね？あれ何て言うの？」

「あれはベルカ古流武術だ。」

「それって、私も使える？」

「多分無理だな。小さい頃から特殊な練習で体鍛えないといけない

し。」

「そっか」

スバルは残念そうに言う。

「私はティアナ・ランスター。ティアナで行いわよ。」

今度はオレンジの髪を二つに結わえた女の子が自己紹介をしてくれた。

「さっきの模擬戦で遠距離魔法を使わなかったけど、どうして？」

ああ、それか。

「俺、遠距離系の苦手なんだよね。」

「そうなんだ…」

えつと次は…赤い髪の子か…

「僕はエリオ・モンディアルです。」

「じゃあ、エリオね。」

「はい。あの突然大きくなったのは魔法じゃ無いんですか？」

「あれは特殊な身体強化魔法だよ。」

身体強化みたいに纏うタイプは得意なんだ。」

「それって難しいんですか？」

「そうでもないよ。他にはない？」

「私からも訊ねて良いか？」

突然、今まで黙っていたシグナムが話しかけてきた。

「良いよ。」

「模擬戦の前に名乗りあった時、『黒い月の騎士』と言ったな。」

「ああ。」

「黒い月とは何だ？」

これは…話して大丈夫なのか？

「いや、答えたくなければいいんだが…」

俺が黙ったのをシグナムは、否と取ったらしい。

「そう言う訳じゃないんだけど…簡単に言えば『暴走する力』かな。」

「暴走…」

「うん？キャロちゃん何か言った？」

「って、聞いてないし…何か考え始めちゃったよ…まっいいか。どうやら今ので質問は終わりらしい。」

「ほな自己紹介してない人達に自己紹介して貰おか。」

「はやてが言う」

「そうだったね。私達、まだして無かったね。」

「私はフェイト・Ｔ・ハラオウンだよ。よろしくね。」

「私は高町なのはだよ。よろしく、シルバ。」

「金髪の人がフェイトさんで、栗毛色の人がなのはさんか。」

「フェイトさんなのはさんね…よろしく。」

「ちよい待ち！」

「はやてが突然割り込んでくる。」

「何だよ、いきなり。」

「何だよ、じゃないわ！何で二人は『さん』付けなのに私にはつかへんのや！」

「なんだそんな事が…」

「はやては同じ教会騎士団の騎士だからいいじゃん。」

「何がいいのかさっぱり分からんわ！」

「で、シグナムの隣にいる人達は？」

「無視かいな！？」

「何か騒いでるが気にしない。」

「あたしはヴィータだ。よろしく。」

「私はシャルですよ。よろしくね。」

「よろしく。」

「二人はやっぱりシグナムと同じ…？」

「ああ、ベルカの騎士だ。」

「ふん。」

「まだ無視するんか！」

「はやてが叫んでくる。」

「え？ごめん何？」

「何かもうええわ。
…今日は解散や。お疲れ…」
そう言うとはやては去っていった。
side out

おまけ

「あれどこ行っちゃったのかな？」
「…何してるんですか？シャーリーさん。」
「ティアナにスバル！良いところに！」
今ね、シルバ君の子猫を探してるんだけど知らない？」
「レグルスなら休憩室の椅子で寝てましたよ。」
「ありがとう！ティアナ。」
「何だっただん？」
「さあ？それよりティアンおなか空いちゃったよ」
「はいはい。」

「やっと見つけた！」
《zzzz》
「寝てますね！チャンスです！」
《！！！！》
「よし、捕まえた！」
《GAOOOOOO！！》
「えっ…ぎゃー！？」

次の日、無数の歯形があるメカニックが休憩室で見つかったとか…

みんなで生きる時代（後書き）

キャラ『今宵のノコギリはよく斬れる…うふふふ』

キャラ「……」

シルバ「…なんで不機嫌なの？」

キャラ「…私がヒロインなはずなのに出演が少ない。」

シルバ「それは仕方ないと思うよ…話進める上で必要なんだよ…多分。」

キャラ「今回なんか最初の方、八神部隊長がヒロインぽいし。」

シルバ「そんな事無いと思うけど…」

キャラ「シルバ君、デレデレしてたし…」

シルバ「してない！してないから睨みながらノコギリ出さないで！」

キャラ『二人を、幸せにはさせませんから。永遠に。』

シルバ「ホントに怖いから！キャラ崩壊してるから！ちょっとスト
ップ！ギャアーーー！！」

ファーストアラート（前書き）

ようやく原作突入です！

しかし…なんの捻りもないorz

キャラとの本格的な絡みは次からです。

誤字脱字気になる点があったら教えてください。

ファーストアラート

side シルバ

あの模擬戦の後、毎日シグナムと模擬戦をしている。

なのはさんからは、シールドなどの基礎魔法を教えてもらった。そのとき判明したのだが、レグルスは魔法の補佐が出来なかった。なので現在、カリムに頼んでデバイスを作ってもらっている。

「おい、シルバ。今日もやるか？」

前から来たシグナムに訊ねられる。

「ああ、頼む。」

「あつ、おったおった。」

「うん？はやてかどうした？」

「カリムからの呼び出しや。シルバ君も連れて来いってさ。」

「了解。シグナム…」

「ああ、わかった。」

「悪いな。」

「かまわん。」

そのままシグナムと別れて、はやてについて行く。

「呼びだして事は、デバイスが完成したのか？」

「それだけやないと思うで…渡すだけならうちがもらってくればいいんやし。」

「つて事は…レリックか…」

「そうとも限らへんけどな。」

「行けば分かるか…」

所どうやっていくんだ？」

「フェイトちゃんは6番ポートに用があるらしいから、ついでに送ってもらふんよ。」

「ふん。」

「フェイトちゃん！遅れてもうたか？」

「大丈夫だよ。シルバも連れて行くの？」

「すまへんな、増えてもうて。」

「いいよ。じゃあ乗って。」

「あいよ。」

side out

「フェイトさん！」

「八神部隊長！」

「あとシルバも。」

「うん。」

「俺はおまけ扱いかよ……」

ちようど早朝訓練が終わり、隊舎に戻るところだったらしい。

「すごい！これフェイト隊長の車だったんですか？」

ティアナが車を眺めながら言う。

「そうだよ。地上での移動手段なんだ。」

「みんな練習の方はどんなや？」

「あ〜」

「がんばってます。」

4人が苦笑いしながら答える。

「エリオ、キャロごめんね。私は二人の隊長なのに全然見てあげられなくて。」

「あついえ、そんな……」 「大丈夫です。」

そんなやりとりを見て、

「そう言えば俺のコールサインって何なんだ……？」

シルバがおもむろに質問する。

「今更やな……セイクリッド01やで。」

「四人ともいい感じで育ってるよ。」

「そうか〜シルバ君も強くなってるらしいし頼もしいな〜」

「3人は今からお出かけですか？」

「私とシルバ君は協会本部でカリムと会談や。」

「私は8番ポートまで。」

お昼には戻る予定だから一緒に食べようね、エリオ、キャラ」

「はい！」

会話を終わるとフェイトは窓を閉じて車を発進させた。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官カリム・グラシアさんか…私はお会いしたこと無いんだけど…」

「そうやったね。」

「はやては何時からの付き合いなんだ？」

後ろの席からシルバが声をかける。

「えっと…教会騎士団の仕事で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかの頃のはずやから…って何でシートベルトしてへんの！？」

返事をしながら後ろを振り返りシルバを見て叫ぶ。

「ふえ！？」

突然の声に驚きフェイトは思わずブレーキを踏んでしまった。

「グエー！！」

当然シートベルトをしていないシルバは前の席に顔面から突っ込みカエルを潰したような声を出す。

「ごめん！大丈夫？」

「気にする事ないよフェイトちゃん。」

シートベルトして無いシルバが悪いんや。」

はやては呆れながら言う。

「痛い…シートベルトって何だ？」

「最初乗った時に説明したやる！もう忘れたんか！？」

「いや…聞いてなかったただけだ。」

「…フェイトちゃん。」

このバカ放り出してええか？」

「ええ！？駄目だよ！」

そんな会話が聖王教会の前に着くまで続いたとか。

「騎士カリム、騎士はやてと騎士シルバがいらっしやいました。」

書類仕事をしているカリムに赤みがかった短髪の女性…シャツハ・ヌエラがモニターで声をかける。

「早かったのね。」

私の部屋に来てもらってちょうだい。」

「はい。」

「それからお茶を三つ、ファーストリーの良いところのをミルクと砂糖付きでね。」

「かしこまりました。」

「よしと。」

そう言いながらカリムは書類を脇に寄せる。

「コンコン」

「どうぞ。」

「カリム、一週間ぶりやね。」

「おじゃまします。」

「二人ともいらっしやい。」

「はやて、部隊の方は順調？」

「どっかの王様が報告書を出してくれへんこと以外は順調や。」

「あちつ。この紅茶おいしいな…」

「…」

「部隊はカリムのおかげで順調や。」

「そう言うことにしておくといろいろお願いもしやすいかな。」

「何や、今日会って話すんはお願い方面か？」

「…」

カリムは真剣な顔になり部屋のカーテンを閉める。

そして幾つかモニターを出す。

それを見てはやはり真面目な顔になり、シルバは紅茶を飲むのを止めた。

「このガジェット…新型？」

「いままでの1型以外に新しいのが2種類。戦闘性能はまだ不明だけど…、これ3型はわりと大型ね。」

本局にはまだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたんだけど…」

「それより俺は真ん中下のが気になるんだか…」

「それが今日の問題です。一昨日付でミットチルダに運び込まれた不審貨物。」

「レリックやね？」

「その可能性が高いから陛下を連れてきてもらったの。」

「なるほどな…これは間違いなくレリックだ。」

「やはりですか…2型と3型が発見されたのも昨日からですし…」

「ガジェット達がレリックを発見するまでの予想時間は？」

「早ければ今日明日。」

「そやけどおかしいな…レリックが出てるのがちよと早いような…」

「おい、出てくるのが早いってどういう事だ？」

「今までは一つ出てくると次のが見つかるまでいつも結構の時間がかかるやけど…それが今回はちよと早いんよ。」

「だから会って話したかったの。」

これをどう判断すべきか、どう動くべきか…」

「なるほどな…」

「レリック事件も、その後に起きるはずの事件も、対処を失敗する訳にはいかないもの。」

「……」

カリムの言葉を聞き、シルバとはやてはお互いを見て無言で頷き合う。

はやてはカーテンを開け、シルバはカリムに紅茶のカップを差し出す。

「陛下？はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。

カリムが力を貸してくれたお陰で部隊はもういつでも動かせる。

即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。

それに……なんて言ってもレリックの本来の持ち主である聖王陛下まで居るんやから。」

「そう言うこと。だからそんな辛気臭い顔すんなよ。」

「ALEXT」

「……！？」

ファーストアラート（後書き）

シルバ「安心して言うのは車の後部座席で眠ることさ。」

シルバ「ようやく原作だよ…しかし、まんまだなこれ。」

キャロ「…まんまじゃないよ…私の出番が原作より少ない…」

シルバ「作者の文才が無い所為だ。」

キャロ「しかも、また八神部隊長がヒロインみたいだし…」

シルバ「だっ大丈夫だよ。ほら前書きで次からは…って書いてあるし。」

だからノコギリしまっ！お願い！それ前回のネタだから！」

初出勤（前書き）

かなり頑張りました。今回からキャロがシルバを意識し始めます。
後書きで少し補足があります。

誤字脱字があつたら教えてください。
あと感想をもらえるとうれしいです。

初出勤

「ALERT」

「このアラートって…」

「一級警戒態勢!？」

なのは達が新デバイスの説明をしていると、突然アラートが鳴り始めた。

「グリフィス君!」

なのはが画面に呼びかける。

「教会本部から出勤要請です!」

「なのは隊長フェイト隊長グリフィス君、こちらはやて!」

「うん。」

「状況は?」

フェイトが状況を訊ねる。

「教会騎士団の調査部が追っていたレリックらしき物が見つかったんよ。」

場所はエーリムの山岳地区

対象は、山岳リニアレールで移動中。」

「移動中って…」

「まさか…」

「そのまさかや。」

内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。

リニアレール内のガジェットは、最低でも三十体。大型や飛行型、未確認タイプも出てるかもしれん。

いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃんいけるか?」

はやてが二人に聞く。

「私はいつでも。」

「私も!」

隊長二人が返事をし…

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、みんなもOKか？」

「……はい……」

四人も声を揃え返事をする。

「よし、ええお返事や！」

シフトはAの3

グリフィス君は隊舎での指揮！リインは現場管制！」

「はい！」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場での指揮！」

「了解！」

はやては全員に指示を出した後、締めくくろうとする。

「ほんなら……」

「キャロちゃん！レグルスよろしく！」

シルバが突然はやての発言を遮る。

「なんで人の話をさえぎるんや！？」

まあ、ええわ機動六課FW部隊出動！」

「……はい！……」

side シルバ

「はやて！俺はみんなと合流するぞ！」

はやてに声をかける。

「そんなこと言うても……どうやって行くんや？」

うつ、確かに……どうしよ……

「陛下、これを。」

そう言つてカリムが鍵と指輪を渡してくる。

「これは？」

「陛下専用のデバイスとバイクの鍵です。」

「何！？よし、ありがたく使わせてもらっぞ！」

「ちょい待ちい！」

ドアから出て行こうとするとはやてに止められた。

「自分、バイク運転できるんか!？」

「ああ、ヴァイスにこの前習った。」

「免許は!？」

「なんだそれ? 旨いのか?」

「旨いわけあるか!！」

何だよ…突然怒んなよ。

「怒るに決まっとるやる!！」

「こころを読むな!！」

「まあまあ落ち着いて、はやて。陛下、免許というのは先日渡されたカードですよ。」

「ああ、あのカードか…」

「何時の間に取ってたんや!？」

「2日前、ヴァイスと出掛けた時。」

「2人で出掛けたと思ったらそんな事しottaんか…」
はやてが頭を抱える。

「まあええ、頼むでシルバ！」

「了解。あつ、そうだ。みんなの乗ってるへりと通信したいんだか…」

「はいな。今送る。」

「よし。じゃあ、セイクリッド01、シルバ・メルゼー! 行くぜ！」

side out

side キャロ

気付くと私は暗闇一人で立っていた。

「チリン」

不意に鈴の音が聞こえ、俯いていた顔を上げる。

目の前にテントのような建物があり、中には村の長老とおばあちゃん、そして小さい私と私の腕に抱かれているフリードがいる。

「アルザスの竜召喚部族、ルシエの末裔キャロよ。」

長老が小さい私に話しかける。

「僅か六歳にして白銀の飛竜を従え、黒き火竜の加護を受けた。お前は真、素晴らしき竜召喚師よ……」

その言葉と裏腹に長老の顔は厳しい。

「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ。」

「え？」

「キョクル」

「すまん……お前をこれ以上、この里へ置くわけにはいかんのじゃ

……」

おばあちゃんが悲しい顔をする。

また私は闇の中で一人になる。

「竜召喚は危険な力……」

自分の両手を見つめる

「人を傷つける、怖い力……」

不意に左手が赤く染まって見える。

「ペロ」

「ひゃう!？」

レグルスに頬を舐められ、夢から現実へと戻り、移動中だということを思い出した。

side out

機動六課オペレーションルームでグリフィス・シャリー・ルキノ・アルトの四人が巨大モニターに映る車両を監視しながら、情報を整理している。

「問題の貨物車両、速度70を維持、依然進行中です。」

「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」

アルトとルキノがモニターを見ながら現状を報告する。

「時間の問題か……」

報告を聞きグリフィスが呟くと同時にオペレーションルームにサイレンが鳴り響く。

「アルト！ルキノ！広域スキャン！サーチャー空へ！」

シャーリーは二人に指示を飛ばしながらパネルを操作しモニターに拡大映像を映し出した。

「ガジェット反応！空から！？」

「航空型！現地観測隊を捕捉！」

アルトとルキノが驚きの声を上げる。

「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今パーキングに到着。車止めて現場に向かうから飛行許可をお願いします！」

「了解！市街地個人飛行、承認します。」

山の間をぬって飛ぶヘリの中。

「ヴァイス君！私も出るよ、フェイト隊長と二人で空を抑える。」

なのはが操縦席に顔を出し、ヴァイスに頼む。

「うっす！なのはさん、お願いします！」

ヴァイスはハッチを開ける。

「じゃ、ちよつと出てくるけど、みんなも頑張ってズバツとやっつけちゃおう！」

「……はい！」

「はい！」

キャロの返事が少し遅れる。

「キャロ。」

なのはに声をかけられ、キャロの肩がふるえる。

「大丈夫、そんなに緊張しなくても。」

キャロに近づき両手で顔を包む。

「離れてても通信で繋がってる、独りじゃないから。ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法はみんなを守ってあげられる、優しくて強い力なんだから…ね？」

キャロに向かって、笑みを浮かべる。

「こちらシルバ！」

なのはの話が終わると同時にモニターが現れる。

「今、俺もそっちに向かつてるから！」

「なんでバイクに乗ってるの!？」

「2日前に一緒に出掛けた時に免許取ったんスよ。」

なのはの驚きにヴァイスが答える。

「そんな事してたんだ…」

ティアナが呟く。

「とりあえず」

なのはがハッチに向かう。

「スターズ01、高町なのは！行きます！」

なのははハッチから飛び降りる。

《Standby ready》

「レイジングハート、セーリットアップ！」

落下する中、左手を横に振るとレイジングハートが光り輝く。

レイジングハートは起動状態に変わる。

なのはの髪型はサイドポニーテールからツインテールになり、白いバリアジャケットを身に纏うと足に翼を作り飛んでいく。

「…お前等も空中でセーリットアップするのか？」

シルバが4人に訊ねる。

「えっ？そのつもりだけど…」

「当たり前でしょ。」

「そのつもりです。」

スバル、ティアナ、エリオの順番で答える。

「…キヤロちゃん？」

唯一返事の無かったキヤロに話しかける。

「えっ？あつ、はい。」

暗い顔をして俯いていた為か話を聞いていなかったようだ。

「キヤロちゃん、怖い？」

「えっ？」

「その顔は緊張だけじゃない…戦うのが怖い？」

「…」

キヤロはうなづく。

「じゃあ、そうだな…キヤロちゃん『がんばるな』。」

「えっ？」

キヤロは何を言われたか理解できないと言った顔をする。

「俺が戦い方を教わった人…父上に一番最初に教えられたことは、

『恐れる』だ。」

「どういう意味…？」

キヤロが訊ねる。

「怖がるのは恥ずかしい事じゃない。その恐怖を乗り越えてこそ強

くなるんだよ。もしも1人じゃ怖すぎるなら…」

「怖すぎるなら？」

「俺と一緒に戦ってやる！だから安心しろ！恐怖を乗り越えて前に

進めキヤロ・ル・ルシエ！」

「…うん！ありがとう！／＼／＼」

キヤロは顔を真っ赤にしながら笑顔で返事をした。

「あの…そろそろ作戦の話をしていいですか？」

2人の会話が終わったのを見てラインが話しかける。

「いいよ。」

「はっ、はい／＼／」

普通に返事をしたシルバに対し、キヤロは恥ずかしそうに返事をする。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、レリ

ツクを安全に確保すること。

ですから、スターズ分隊とライトニング分隊には別れてガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです。それとシルバは着き次第ライトニングに合流です。

レリックはここ、7両目の重要貨物室。スターズがライトニング、先に到達したほうがレリックを確保するですよ！」

「……了解！」「……」

「で……」

5人の返事を聞き、リインはその場で一回転する。

「私も現場において、管制を担当するです！」

騎士甲冑を身に纏いニツコリ笑う。

「じゃあ俺は急ぐために運転に集中するから。」

そう言うとしルバは通信を切る。

「さうして新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ！準備はいいか？」

ハッチを開け、ヴァイスがワードメンバーに声をかける。

まずはスバルとティアナがハッチに向かう。

「スターズ03、スバル・ナカジマ！」

「スターズ04、ティアナランスター！」

「「行きます！」」

2人はお互いの顔を見合わせ、一気に飛び降りた。

「行くよ、マツハキャリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

「「セットアップ！」」

《《standby ready》》

落下中の2人の声に応え、マツハキャリバーとクロスミラージュは起動状態に変化する。

2人は入隊前に着ていたジャケットをベースに、スターズの隊長であるなのはのものを動きやすいように改良されたバリアジャケットを纏う。

マツハキャリバーはローラーシューズに変わりさらにリボルバーナックルを瞬間装着し、クロスミラージユは拳銃に変わる。

「次、ライトニング！チビ共、氣い付けてな。」

「はい！」

ヴァイスは、エリオとキャロに声をかけた。

「大丈夫？」

「うん！シルバ君のお陰で元氣出たから。」

「よかった。」

「心配してくれてありがとう。」

2人は顔を見合わせてから…

「ライトニング03、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！それとレグルス！」

「キュクル」

《GAOOO!!》

「行きます！」

かけ声と共に、一気に飛び降りる2人。

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「「セットアップ！」」2人の声に反応しデバイスが一瞬光り起動状態に変化する。

エリオは赤い服に白いコートを纏ったものに、キャロはピンクの服に白いマントを纏い、白くて丸い帽子のバリアジャケット。

ストラーダは槍に、ケリユケイオンはグローブに変わる。

車両の前方にスターズが、後方にはライトニングと本来の姿に戻ったレグルスが降り立つ。

「アレこのジャケットって…」

「もしかして…」

スバルとエリオの声にリインが答える。

「みんなのジャケットは各部隊の分隊長さん達のものを参考にしてるですよ。ちょっと癖はありますが高性能です。」

「……」

「……はっ、スバル感激は後！」

いち早く復活したティアナがスバルをたしなめる。

次の瞬間、屋根が突き破られる。

《バリアブル バレット》

スバルはマッハキャリバーで走り出し、ティアナはクロスミラージュで弾丸の生成する。

「シュートッ！」

魔力弾2発を屋根の上に上がってきたガジェットに当て撃墜する。

「うおおおっ！」

同時に、大きく開いた穴からスバルが車中へ飛び込み、真下に居たガジェットに拳を叩き込み撃破する。

「はあああっ！」

そのまま壁を垂直に走りガジェットに突っ込み破壊する。

床に着地するとスバルに向かって攻撃が放たれるが、しゃがんで避け、その姿勢のまま壁に向かって走り出す。

《アップゾーブ グリップ》

そのままのスピードで壁を駆け上がり、ナックルスピナーを回転させ、

「リボルバー……」

壁際に浮かんでいるガジェット目掛けて衝撃波を叩き込む。

「シュートッ！」

ドーンッ！！

「わあゝ！」

あまりの出力に勢い余って屋根ごと突き破ってしまい、急に足場を失いスバルは慌てるが……

《ウイング ロード》

「えっ？」

マツハキヤリバーがウイングロードを展開し、隣の車両へスバルを移動させる。

「マツハキヤリバー、おまえってもしかして、かなりすごい？」

スバルの言葉を聞きマツハキヤリバーが光る。

「加速とか、グリップコントロールとか…それにウイングロードまで…」

《私はあなたを、もっと強く、速くするために作られましたから》

「でも、マツハキヤリバーにはＡＩとか心があるんでしょう？だから言い換えよう。」

スバルはさつき出来た穴を見つめながら言う。

「おまえはね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ。」

《同じ意味に感じます。》

「違うんだよ、色々と」《考えておきます。》

「うん。」

「ティアナ、どうですか？」

リインがティアナに訊ねる。

「ダメです、ケーブルの破壊、効果なし！」

ティアナは、スバルとは別行動を取り車両を止めようとしていたのだった。

「了解、車両の停止はわたしが引き受けます。ティアナはスバルと合流してください！」

「了解。」

《ワンハンド モード》

ティアナは二挺に拳銃していたクロスミラージュを元の一挺に戻す。そしてスバルと合流するために走り出す。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、弾体形成もサポートし

てくれるんだね。」

《はい。不要でしたか？》

「あんたみたいに優秀な子に頼りすぎると、あたし的には良くないんだけどね。でも実戦だと助かるよ。」

《ありがとうございます。》

キャロとエリオの2人は順調にガジェットを撃破し、8両目に入ったがそこには大型のガジェットが居た。

エリオとキャロの姿を確認したガジェットは、アームを2人に向かって伸ばす。2人はその場から大きく飛びのいて回避する。

キャロは着地と同時にフリードに指示を出す

「フリード、ブラストフレア！」

「キュクルー！」

「ファイア！」

ガジェットに向かって火炎弾を吐き出す。

ガジェットはアームでその火炎弾を弾きそのままキャロに向かって突き出す。

そのアームをキャロの隣にいたレグルスの体当たりで逸らす。

その隙にエリオが攻撃を打ち出す。

「てえええええい！」

大きく振りかぶったストラダを、渾身の力でガジェットに向けて振り下ろした。

「か、硬い……ッ！」

しかしストラダは、衝突の余波でスパークを撒き散らすも、ガジェットにダメージを与えられなかった。

「AMF……！」

ガジェットがAMFを発動さえ、ストラダに通っていた魔力が霧散してしまう。

「こんな遠くまで…!?」

かなり離れていたキャラコの魔法まで打ち消されてしまう。

「くっ……!」

エリオは襲い掛かってきたアームをストラダで受け止める。

魔法による補助なしでは辛いのか少しずつ押され始める。

それを見たキャラコは急いで近寄ろうとするが…

「く……大丈夫、任せて……!」

エリオに止められる。

そのエリオに向けガジェットがレーザーを放つ。

それをとつさに上に跳び避けるが、直ぐに次の攻撃が来る。

次々と放たれるレーザーを転がることで避けるがアームによる攻撃を受け吹き飛んでしまう。

「うあああ!?!」

さらにガジェットはエリオを捕らえようとアームを突き出す。

「やああ!」

キャラコはエリオを突き飛ばし助けるが、代わりに捕まってしまう。

「きやあ!」

そしてガジェットは屋根の上によじ登りキャラコを崖に放り出そうとするその瞬間、

「ドゴオオン」

上から来た何かによって車両内に叩き落とされる。

「よお鉄屑野郎!」

衝撃によつて発生した煙の中から現れたのは、騎士甲冑に身を包みキャラコを左腕に抱き抱えた大人シルバだった。

「シルバ君…」

「俺の仲間が世話になったな。お礼にたたき壊してやるよ。」
声にはかなりの怒りが込められている。

「レグルス。」

主に呼ばれたレグルスはすぐ隣に降り立つ。

「キャラコちゃんとエリオを頼む。」

《GAU!》

レグルスは一度吠えたとキャロを背中に乗せ壁に寄りかかっているエリオの元に行く。

「いくぜ!」

無事に離れたことを確認しシルバはガジェットに向かって走り出す。それに対しアームを突き出すが…

「断空拳。」

シルバの拳によって弾かれる。

そのままシルバは一気に距離を詰める。

「崩山拳!」

相手に振動を与え内部にダメージを与える技を受け、ガジェットは爆発を起こす。

「すごい…」

キャロとエリオは自分たちが2人がかりで倒せなかった相手を簡単に倒したシルバの強さを見て思わず呟く。

「3人とも聞こえるですか?」

「ああ。」

「はい。」

入ってきたラインの通信に返事をする。

「ライトニングは現場の引継をお願いするです。」

シルバはスターズと一緒に聖王教会までレリックの輸送をお願いするです。」

「また来た道を戻るのが…取り敢えずバイク取りに行かなきゃな…ッ!」

シルバはまた聖王教会にいくと聞いてめんどくさそうに言うが突然何かに気付いたように崖の先を見つめる。

「どうしたですか?」

シルバの行動にラインが訊ねる。

「…誰かに見られてるな…そこか!」

シルバはビー玉サイズの黒い球体を作り出す。

「暴王の流星！」

《メルゼズ・ランス》

そのまま球体は放たれると目にも留まらぬ速さで駆け抜ける。それはまるで…

「黒い流れ星…」

そう誰かが呟いた。

とある研究所で白衣を着た男が今回の機動六課の映像を見ていた。彼の左には通信用のモニターが開いており、そこには一人の女性が映っている。

「刻印ナンバー9、護送態勢に入りました。」

「ふむ…」

画面の女性の言葉に男が反応する。

「追撃しますか？」

「…やめておこう。レリックは惜しいが、彼女達のデータが取れただけで充分さ…それに」

そういった男の視線の先には、スバルとキャロ、そしてなのはの映像があつた。

さらに男は妖しげな笑みを浮かながらモニターの画面を変える。

「ふはははは、この案件はやはり素晴らしい！」今度はフェイトとエリオの映像に変わった。

「生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャン…」

だが男は最後まで言葉を紡げなかった。なぜなら…

「映像が消えた…いや消されたのか…」

そういうと、男は女性の方を向く。

「今、映像が消された瞬間を出せるかい？」

「はい。」

それを聞くと男は再びモニターをみて…

「フフフ……アハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑い出す。

「これは間違いなく『暴れ回る王の力』……なぜ、この時代に現れたのか！とても興味深い！！まるで私の為のような部隊だ！」

初出勤（後書き）

シルバ「人は誰でも、自分のいるべき世界を探している。そこは偽りの無い、陽の当たる場所！そこへ行く為に、人は旅を続ける。そして旅を恐れない！」

キャラ「今回のシルバ君かつこよかったよ／＼／」

シルバ「えっ？あつ、ありがとうキャラちゃん／＼／」

はいはい、後でにしてくださいね。

シルバ「ごほん！今回の話で出てきたバイクの免許に関する補足だったな。」

キャラ「この小説では管理局か聖王教会に所属していると、18歳未満でも取る事が出来る…って設定です。」

シルバ「免許の取り方も、講習を受けて試験運転をして平気だったらOKと言う事にしてるらしい。」

まあ要するに取り方は原付みたいなかんじだな。

キャラ「ちなみにミッドチルダの成人年齢は16歳という設定です。」

閑話 シルバの一日（前書き）

かなり短いです。

誤字脱字があつたら教えてください。
あと感想をもらえるとうれしいです。

閑話 シルバの一日

《GARUGARU》

レグルスがシルバの顔を舐める。

「ふあゝもう朝か…おはようレグルス。」

眠い目を擦りながらシルバが目を覚ます。

《GAO》

「さて、早く着替えてランニングに行くか。」

「ふつ、ふつ、ふつ。」

1時間ほど走り体を温めた後に、六課の裏にある森で霸王流の基礎訓練に入る。

「ふゝ、とりあえずメシ前はこんなところか…」

そう言うのと側の木に引っかけていた上着を取り、羽織り隊舎のシャワー室に向かい歩き出す。

シャワーを浴びた後、食堂の入り口でフォアードの四人に会った。

「おつ、みんなも今からメシか？」

「うん！シルバも？」

「ああ、もう腹ぺこペコだ。」

「よかったら、シルバ君も一緒に食べない？」

「別に良いぞ。」

「じゃあ、私とスバルが席を取っておくから、チビ組が先に食べ物取ってきなさい。」

「「ありがとうございます。」」

ティアナの発言にキャロとエリオはお礼を言うが…

「おい！いい加減チビ呼ばわりを止める！」

シルバは呼び方に文句を言う。

「はいはい。いいから行つてきなさい。」

ティアナは苦笑いしながら3人を送り出す。

「いつも思っただけどさ…」

シルバがスバルとエリオを見る。

「何？」

見られた2人はスパゲティを食べながら返事をする。

「とりあえず食べ物頼張りながら喋んな。」

お前等の胃袋つてどうなつてんの？明らか収まんないだろ、構造的に。」

「えゝこれでも押さえてるんだよゝ」

「僕は育ち盛りですから。」

「スバルはおかしいとして…」

「おかしくないよ！」

スバルは直ぐに抗議する。

「「おかしいから。」」

シルバとティアナに当然のように返される。

「エリオ君の言うとおり、育ち盛りだからじゃないんでしょうか。」

キャロが言う。

「まるで俺は育ち盛りじゃ無いみたいな言い方だな、それ。」

シルバが不機嫌そうに文句を言う。

「ええ！？そつそう言うつもりで言つたわけじゃ無くて…」

若干涙目になりながらキャロが答える。

「冗談だよ。それより時間良いのか？訓練始まる10分前だぞ。」

「「「え？」「」「」」

シルバに指摘され4人は時計をみる。
「……遅刻だー!」

訓練所の片隅で、シルバとシグナムが向かい合っていた。

「こっちは用意できたぞ。」

「よっしゃ!じゃあ始めますか!」

シルバの声を合図に2人がぶつかる。

「また勝てなかった……」

シルバは悔しそうに呟いた。

「ふつ。当たり前だ、私はヴォルケンリッターの長だからな。直ぐに抜かされたら『烈火の将』の名が廃る。」

シグナムは嬉しそうに言う。

「だが、かなり強くなってるではないか。最後のは私もかなり危なかったしな。」

「そりゃあ毎日戦ってるしな。これで強くなって無かったら泣くわ。」

「ふつ。それもそうだな。もう昼だし今日はここまでだな。」

「ああ、付き合ってくれて、ありがとな。」

「かまわんさ。私も楽しませてもらっている。」

午後、シルバは今に残っている、聖王や霸王の文献を読むために、ラインと向き合ってミッド語の勉強をしていた。

「なるほど……この意味はこれか?」

「違います。その意味はこっちです。」

「じゃあ、これは？」
「それはですね…」

「もうこんな時間ですか…今日はここまでにします。」
「はいよ。」

晩ご飯の後、食堂でシルバはキャロ、エリオと雑談をしていた。

「ふ〜ん。大変そうだな…」

「うん。でも確実に強くなってる気がする。」

「私も六課に来てから体力がかなり増えたよ。」

「まあ、なのはさんはスパルタだしな〜」

「ハハハ…」

2人は乾いた笑いを浮かべる。

「バタバタバタバタ」

「なんだ？」

突然誰かが走ってくる音が聞こえて来た。

「見つけたで！シルバ君！」

「ちっ、はやてか。じゃあな！2人とも！」

そう言うシルバは、はやてが居るのは別のドアに向かって走り出す。

「「え？え？」」

当然2人は理解が追いつかない。

「待ちや！今日の報告書出さんかい！」

そう言うとはやてはシルバを追う。

「断る！めんどくさい！」

「ちゃんと書かせなこっちがカリムに怒られるんな！」

「知るか！」

「腕が痛い……」

結局あの後、はやてが呼んだなのはのバインドで捕まり報告書を書かされる羽目になったのだった。

「明日も早いし、今日は魔法系の勉強はいいや。とっとと寝よ。おやすみレグルス。」

《GAU》

閑話 シルバの一日（後書き）

スバル「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな。」

キャロ「今回はシルバ君の一日でした。」

シルバ「時期的には、ファーストアラートの前だな。」

竜魂召喚（前書き）

なんか上手く事が出来ない…

今エリオとルーテシアをくつつけようと思うんですが、どのタイミングで六課に合流させるか悩んでるんです。

なので、後書きにアンケートを作るんで答えてくれすとうれしいです。

誤字脱字、気になる点があったら教えてください。

竜魂召喚

side シルバ

「魔法の制御？」

「うん。」

俺は今キャラちゃんに相談を受けている。

「私の魔法に一つ、どうしても使えないのがあるの。」

「ふゝん。でも何でそれを俺に？」

「前にシルバ君が『暴走する力』って言ってたから…」

「コントロールのこつを聞きたい、って所？」

「うん。…それとシルバ君と居ると成功しそうな気がして／＼」

「え？何？」

最後の方は声が小さくて聞こえなかった。

「ううん！何でもないよ！」

「ふゝん。まっいつか。

じゃあ、行こうか。」

「えっ？」

「練習するんでしょ？」

「うん！」

side out

2人はシルバがいつも朝、霸王流の練習をしている場所にきた。

「それじゃあ、どんな魔法で今までどんな時に使ったのかを教えて。」

「

シルバは側にある石に腰をかけながら、キャラにも座るように示す。

「えっと、名前は『竜魂召喚』フリードを本来の姿に戻す魔法。今までは危ない時や、力を見せる時ぐらいしか使ったことしか…」

返事をしながらキャラも石の上に座る。

「分かった。じゃあ、まず力と対話してみたら？」

「力と対話？」

「ああ、ごめん。分かり難い言い回しだったかな。要するに意識を力に集中するって事。」

「分かった、やってみる。」

「気持ちを落ち着けて…自分の出来ると思えるまで集中力を高めて…」

「……………」

キャラが瞑想に入っただのを確認するとシルバも瞑想を始めた。

《Drive ignition》

「来たか…」

ケリユケイオンの声にシルバは瞑想を解く。

「フリード…今まで不自由な思いをさせてごめんね。」

キャラは瞑想を解いてフリードに話しかける。

「今ならちゃんと…制御できるから！行くよ！竜魂召喚！！」

ケリユケイオンが強く光り輝き、次の瞬間キャラの体が少し浮き上がる。そしてさらに、キャラを包むように光の球体が発生する。

「蒼穹を走る白き閃光！我が翼となり、天を駆けよ。」

ケリユケイオンが再び、強く光り輝く。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

キャラの詠唱が完了すると、光の球体を吹き飛ばして白い飛竜が姿を現す。

「…やった！！しっかり制御できてる！！」

フリードの背中に跨ったまま、キャラは喜びの声を上げる。

「シルバ君！ありがとう！！」

「俺は何もしてないよ。ただヒントをあげただけさ。」

シルバは肩を竦めながら言う。

「そのヒントが有ったから出来たんだよ！」

「…それより折角だし、ちょっと戦ってみようか。」

シルバは顔を背けながら、わざとらしく話題を変える。

「うん！！」

「で？その結果、森を燃やした…と。」

シルバとキャラは、はやてに呼び出され部隊長室にいた。

「ああ。」

「はい…」

シルバは悪びれなく、キャラはすまなそうに返事をする。

「キャラは反省しとる様やからええよ。問題は何でシルバが反省してないかや！」

「いや、悪いと思ってるよ。でも、どうせ直ぐ植えるんだろ？」

「うがー！！」

「はやてちゃん！？落ち着くですよ！！」

全く反省してないシルバに、はやてが頭を掻き毟ろうとするがリインに止められる。

「はあああ…ふう。よし！落ち着いたで。」

とりあえずシルバは今月給料なし！それと報告書百枚、明日までに提出。

キャラは厳重注意と報告書二十枚、期限はシルバと同じや。」

しばらくし、ようやく落ち着いたはやては2人に罰を出す。

「ちよつと待て！何で俺はそんなに処分が重いんだよ！」

シルバが異議を唱えるが…

「前科が有るからや！今まで何回、問題起こしたんや？」
「うぐ…」

はやての言い分に負けてしまう。

その日の夜、シルバの部屋の電気は消えなかったとか……

竜魂召喚（後書き）

キャロ「竜の肺は焰を吹き、竜の鱗は焰を溶かし、竜の爪は焰を纏う。」

キャロ「今回はシルバ君が報告書の所為で居ないので、ゲストとしてフェイトさんが来ています。」

フェイ「なんか、ぞんざいな書き方されてる気がするけど…」

キャロ「では前書きで書いたようにアンケートです。」

フェイ「エリオのお相手に関する事だね。」

キャロ「ルーちゃんが六課に合流するタイミングの候補は…」

1、【ホテル・アグスタ】後

2、【その日、機動六課】後

3、【約束の空へ】後

4、まず、くっ付けない

キャロ「以上の四つです。」

フェイ「くっ付けない場合は、他のヒロインを考えるつもりらしいです。」

キャロ「それでは…」

二人「また合いましょう!」「」

個別スキル（前書き）

少し遅くなりました。 すいません

取り合えずルーテシアの合流？保護？は【ホテル・アグスタ】の後になりました。

その為オリジナルが増えるので、かなりペースが落ちると思います。

個別スキル

side リンフォース？

5月13日。

部隊の正式稼働後、初の緊急出勤がありました。

密輸ルートで運び込まれたロストログア【レリック】をガジェットが発見し、輸送中のリニアレールを襲撃。それを阻止、レリックを回収するという任務でしたが、六課前線メンバー一同の活躍もあって無事に解決。

確保した刻印ナンバー？のレリックは、聖王教会にて嚴重封印中。

初任務としてはまず問題ない滑りだした、と部隊長のはやてちゃん。六課の後継人、騎士カリムやクロノ提督たちも満足されているようです、つと。

「リン曹長。」

私は名前を呼ばれ顔を上げる。

「ああ！シャーリー！」「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌を付けていたですよ。」

「ああ、なるほど。」

開いていたモニター閉じてシャーリーの側に飛んでいく。

「シャーリーは？」

「新しいデバイス達の調子を見に、訓練所の方に行ってきたんですよ。」

「そうですね、みんな元気でした？」

「はい。フォード陣も、デバイス達ももう絶好調。」

side out

「おら、いづくぞー！！」

ヴィータの声にスバルが身構える。

「うりゃああああ！」

「マツハキヤリバー！」

《プロテクション》

「であああ！」

グラーファイゼンの一撃をスバルが受け止める。

「くうっ……」

「でりゃああああ！」

「うわああああ！」

しかし、少し耐えたもののヴィータに押し負け側にある木まで吹き飛ばされてしまう。

「ふむ……」

振り抜いた姿勢のままヴィータは感心した様な声を出す。

「いったた〜」

「なるほど……やっぱバリアの強度自体はそんなに悪くねーな。」

ヴィータは構えを解くとそう言う。

「あはは、ありがとうございます。」

そう言いながらスバルはヴィータの元に行く。

「あたしやお前のポジション、フロントアタッカーはな、敵陣に単身で切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。」

防御スキルや生存能力が高いほど、攻撃時間を長くとれるし、サポート陣にも頼らねーですむって、これはなのはに教わったな？」

「はい！ヴィータ副隊長！」

スバルは元気良く返事をする。

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この三種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねーように、下半身の踏ん張りとかマツハキヤリバーの使いこなしを身につける。」

「頑張ります！」

《学習します》

スバルとマツハキヤリバーがそれぞれ答える。

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからな。」

そう言いながらヴィータは、手首を使ってクラーフアイゼンを一回転させると、スバルに突きつける。

「クラーフアイゼンにぶつ叩かれたくなかったら、しっかり守れよ」

「はい！…あの少し質問して良いですか？」

「何だ？」

「ヴィータ副隊長達は何でシルバみたいに、いつもフィールド系を纏わないんですか？」

「何…？いつも纏ってるだと？それは本当か？」

「えっと…目を凝らすと、さっきのヴィータ副隊長が纏っていたのに似たやつを、シルバが纏ってる様に見える…気がするんです。」

「ふむ…」

ヴィータはその場で考え込む。

「あの…私、変なこと言いましたか？」

「ああ…いつも纏ってるなんて正気の沙汰じゃねー。普通は魔力が持たないはずなんだが…」

「じゃあ、私の気のせい…ですかね…？」

「ああ、多分な…」

そう言ったヴィータの顔はどこか晴れていなかった。

「エリオとキヤロは、ヴィータやスバル、シルバみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば…」
スフィアがフェイトに向け、ゆっくりした弾を出し、それをフェイトは避ける。

「こうやって、こんな風に。まずは動き回って狙わせない。攻撃が

当たる位置に…」

話しながら走っていたフェイトが一瞬立ち止まる。スフィアがその隙を見て攻撃するが、それをかわす。

「長居しない…ね？」

「はい！」

「これを、低速で確実にできるようになったら…スピードを上げていく。」

先ほどより速い弾をフェイトは確実に避けていく。次にスフィアから一斉に弾が出され、フェイトが煙の中に消える。それを見て息をのんだ2人に後ろから声がかかる。

「こんな感じにね。」

二人が振り向くと、いつの間にかフェイトが立っていた。

先ほどのフェイトが立っていた場所を見ると地面が抉れており、回避した道がわかるようになっていた。

「うわぁ…すごい…」

エリオが驚きの声を上げる。

フェイトはニコニコしながら話を続ける。

「今のも、ゆっくりやれば誰でもできるアクションを早回しにしてるだけなんだよ？」

「は、はい！」

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの。」

そう言うとフェイトは2人の肩に手を乗せる。

「ガードウィングのエリオは、どの位置からでも攻撃やサポートができるように。」

フルバックのキャラは、素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように。

確実に、有効な回避アクションの基礎をしっかりと覚えていこう。」

「はい！」

「キョクル！」

フェイトの言葉に、エリオとキャロ、そしてフリードが元気よく返事をした。

桃色の弾とオレンジの弾がぶつかる。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

忙しく弾を撃ち続けながら返事をするティアナの足下には、空の力ートリッジが幾つも落ちていた。

「ティアナみたいな精密射撃型は、いちいち避けたりしてたら、仕事ができないからね。」

そう言いながら、なのはは指先に青い弾を呼び寄せる。

「っ！？バレット、レフトV、ライトRF！」

クロスミラージュに指示を出すティアナに後ろから弾が迫ってくる。

《警告》

「っ！？」

ティアナは思わず転がって避けてしまう。

「ほら、そうやって動いちゃうと、後が続かない！」

なのははそれを咎めながら、不規則な弾と青い弾を打ち出す。

《M V R F》

ティアナは不規則な弾を追う弾と、青い弾を撃ち落とす弾を撃つ。

「そう、それ！足は止めて、視野を広く！射撃型の神髄は……」

ティアナはその場に留まり、弾を次々打ち落としていく。

「あらゆる相手に、正確な弾丸をセレクトして命中させる。判断速度と命中精度！」

《リロード》

なのはの言葉を引き継ぎながらティアナはリロードし、撃ち続ける。

「チームの中央に立って、誰より早く中長距離を制する。それが、私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ。」

「はい！」

「いやゝやってますねゝ」

「初出勤が良い刺激になったようだな。」

シグナムとヴァイスが4人の訓練をモニターで見ながら話をしていく。

「いいっすねえゝ若い連中は。」

「若いだけあって、成長も早い。まだしばらくの間は、危なっかしいだろうがな。」

「そうっすね。あつ、シグナム姉さんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな…スバルやエリオのようにミッド式と混じった近代ベルカ式とは勝手が違うし、剣を振るうしかない私がバックス型のティアナやキャロに教えられる様な事もないしな…」

まあ、それ以前に私は人に物を教える、という柄ではない。戦法など届く距離まで近づいて斬れ、ぐらいしか言えん。」

「ははは…すげー奥義では有るんですけど…確かに連中には、まだちいーと早いですね。」

「だから私に出来る事と言えば、経験が足りないシルバに付き合うぐらいしかない。」

「そう言えばシルバはどうしたんすか？」

「思い出したようにヴァイスが言う。」

「また懲りずに物を壊して、報告書を書いているらしい。」

「ははは…今度は何を壊したんすか？」

「洗濯機だ。なんでもレグルスを洗濯機で洗おうとしたらしい。そしたら入れられたレグルスが中で暴れて破壊したらしい。」

「…相変わらず常識知らずなことをしますね…あいつ。そろそろ部隊長の胃に穴が開くんじゃないっすか？」

「ああ、かなり多く胃薬を飲んでおられる。」

そう言うと2人は同時にため息を付いた。

「ピー」

「はあい、じゃあ午前の訓練終了。」

「「「「はあ、はあ、はあ、はあ、」」」」

「はあい、お疲れ。個別スキルに入ると、ちよっときついでしょう？」

訓練でかなりグロッキーになっている4人に、なのはが話しかける

「ちよっと...と言うか...」

「その...かなり...」

「フェイト隊長は忙しいから、そうしよっちゅう付き会えねえけど、あたしは当然お前等に付き合ってやつからな。」

「あっありがとうございます...」

ヴィータのあまり嬉しくない話しに、スバルは苦笑いしながら答える。

「それからライトニングの2人は特にだけど、スターズの2人もまだまだ体が成長してる最中なんだから、くれぐれも無茶はしないように。」

フェイトが少し注意をする。

「「「「はい！」」」」

「じゃあお昼にしよつか。」

「「「「はい！」」」」

7人が隊舎に着くと、はやて、リン、シルバの3人とそれを見送りに来たシャーリーとあった。

「あっみんなお疲れさんや。」

「……はい!」「」

「はやてとリインは外回り?」

「シルバ君も一緒ですよ、ヴィータちゃん。」

「うん。私とリインはちょナカジマ三佐と、シルバはカリムとお話してくるんよ。」

はやての言った名前にティアナとスバルが反応する。

「スバル、お父さんやお姉ちゃんになんか伝言とか有るか?」

「いえ、大丈夫です。」

「それじゃあ、はやてちゃん、リイン、シルバいつてらっしやい。」

「ナカジマ三佐とギンガによく伝えてね。」

「うん。」

「いつてきまゝす。」

「じゃあね」

3人の挨拶が終わるとはやては車を発進させた。

おまけ

「しっかし、このオンボロ大丈夫なのか?」

「なんやと!」

「大体ちゃんと運転できんのか?」

「洗濯機の使い方分らん奴に言われとう無いわ!」

「使い方は分かる!」

「分かる奴は猫洗おうとせんわ!」

「なんだと!」

「あわわわわ」

こんなやりとりが車の中であつたとか…

個別スキル（後書き）

なのは『よく覚えておけ…管理とは成長させることだ。現状を維持することではない』

キャラ「今回もシルバ君はいません！」

フェイ「何でそんなに胸張って言うの？」

キャラ「本当は今回だけで【進展】の話を終えるつもりだったらしいですよ？」

フェイ「…なんか私の扱いがひどいよキャラ…」

キャラ「それはそうとサウンドステージやるんですかね？」

フェイ「なんか作者が『CDが無くなった!!』とか言ってたね。」

キャラ「まあ、CD探す前に【進展】終わらせろ、って話ですよね。」

フェイ「…私のキャラがどんどん黒くなってる…」

キャラ「それではまた次回会いましょう……あつたら。」

フェイ「無い可能性があるの!？」

キャラ「冗談です……多分。」

進展（前書き）

わーい、テスト期間だコンチクショー！！
勉強したくねーな…受験生だけど…orz
今回は色々伏線？的な何かがあります。
感想をもらえるとうれしいです。

進展

side シルバ

「ほな、また後で迎えに来るからな。カリムによろしく」

「はいよ。」

はやてと別れ聖王教会の中に入る。

「すいません」

「はい、なんでしょうか。」

受付の人に話しかける。

「騎士カリムに呼ばれてきたんですが…」

「お名前を。」

「シルバ・メルゼー。」

「少々お待ち下さい。」

そう言うのと近くの受話器を手についた。

「はい…そうです…えっとシルバ・メルゼー様です…はい、分かりました。」

どうやら話は終わったらしい。

「そのまま執務室に、とのことですよ。」

「分かりました。」

「コンコン」

「どうぞ。」

執務室のドアをノックし中に入る。

「おじゃまします。」

「はい。どうぞお掛け下さい。」

「はいよ。」

俺とカリムは向かい合うように腰掛ける。

「部隊の方はどうですか？」

「報告書の量以外は、いい感じだぞ。」

何故か俺だけ報告書が多いからな…

物を壊す所為です。

「ははは…まあ良かったです。」

「んで？世間話のためにわざわざ俺だけを呼んだ訳じゃないだろ？」
さつきまでの和やかな風陰気を消す。

「…こちらの資料を。」

カリムがモニターを出す。

「…これはいつのだ？」

「かなり古いです。確か八年前ですね。」

ふるっ！！

「…何でそんな古い資料を調べたんだ？」

「この間、あの案件の資料を集めていた時に、偶然出て来たんです。」

やはり魔力の特殊変換…か。

「…当たり前だ。」

「ではやはり…」

「ああ…生体兵器の強化パーツとして使ってやがる。」
荒ぶる気持ちを抑えて、椅子に深く座り直す。

「このデータをコピーしてくれ。六課に持って行く。」

「分かりました。」

これで六課の用件は終わった。

「さつき少し話に出たが…」

「はい。現在の所は陛下や私を入れて、6人は判明できました。ただ…」

「ただ？」

「先ほどの資料を読めばお分かりと思いますが…あの事件で壊滅した部隊に2人、いたことが確認できています。」

「って事は、実質2人か…」

やはり難しいか…

「それと一つ気になることが。」

「何だ？」

「はい。壊滅した部隊の2人の内、1人には子供が居たらしいのですが、数年前から行方不明になっているんです。」

怪しいな…

「捜査は？」

「それが全く進展していない…いえ進展させようとしていないんです。」

また分かり難い言い回しを…

「分かり易く言うと？」

「調査が実質行われていないんです。」

はい、アウト。

「レリックや母上縁の物の盗難と言い、その子供と言い…狙いは明らかに聖王関連だな。」

「その可能性が高いかと。」

丁度その時、モニターが現れる。

「騎士カリム、騎士はやてがいらっしやいました。」
もうそんな時間か…

「じゃあ、今回はこれでお開きだな。」

「はい。こちらが資料です。」

小さい端末を渡される。

「ありがとう。また進展があつたら、呼んでくれ。」

「分かりました。」

side out

和風な食事処

はやて、シルバはナカジマ2人と食事をしていた。

「こいつがお前の言っていたガキかい。」

「はい。聖王教会からの派遣…言う扱いです。」

ゲンヤの質問にはやてが答える。

「私はギンガ・ナカジマ。よろしくね?」

「俺はシルバだ。…初対面で言うのもなんだが…」

シルバがゲンヤの方をみる

「なんだ?」

「なんで黄色いネクタイなんだ?ぶつちやけ変だぞ。」

シルバがとんでもない発言をする。

「こんの、どアホがー!!」

ドゴーン

明らかにおかしい音を出しながら、はやてがシルバの頭を殴る。

「てんめえ、何しやがる!!」

「こつちのセリフや!!何いきなり失礼なこと言つとんねん!!」

「上脱ぐとかなり気になんだよ!」

「そつやとしても普通言わんやろ!」

「大体なんだ?さつきからいい子ぶつて。そんなんだから子狸つて言われんだよ。」

「なんやと!!」

「おい!テメー等少し静かにしろ!」

結局、最後はゲンヤの一言で静かになった。

しばらくして料理が来た。

「しっかし、旨い魚だな、これ。」

シルバが焼き魚を食べながら言う。

「おう。この店の焼き魚はミッド1旨いからな。」

シルバの言葉にゲンヤが答える。

「店の雰囲気も良いし。」

「分かってんしゃねえか、小僧。」

どうやらシルバはゲンヤにかなり気に入られたようだ。

「うん?フェイトちゃんからの通信や。」

そう言つてはやてはモニターを出す。その横で、
「これも一匹食つか?。」

ゲンヤがシルバに小魚を薦めていた。

「いいのか?」

「おう、ガキは遠慮すんな。」

「サンキュー。」

そんな会話をしているとき...

「ふう〜」

はやての通信が終わる。「何か進展ですか?」

ギンガが訊ねる。

「事件の犯人の手掛かりがちょっとな。」

そう言うとはやては席を立つ。

「と言うわけですいませんナカジマ三佐。私達はこれで失礼させて貰います。」

「おう。」

そう言うのと伝票を取ろうとするが、ゲンヤに取られてしまう。

「そんな...」

「さつさで行つてやんな、部下が待つてんだろ。」

はやてを見ながらゲンヤが言う。

「はい。ほら行くでシルバ。」

「まだ食つてんだが...」

「仕事や諦めえ。」

はやての言葉に、名残惜しそうにしているシルバを見てゲンヤが言う。
「う。」

「また今度一緒に来るかい?」

「いいのか?」

「ああ。その時やスバルも連れてこい。」

「分かった!ほら行くぞ、はやて。」

「ちよつ待ちい。それではまた。」

はやてがそう言つて2人と別れる。

薄暗い研究所で白衣を着た男が、人間の様な物が入れられたポットの並んだ通路を歩いていく。

「ゼストとルーテシア活動を再開しました。」

奥の広間に着くと女性の写るモニターが表れ、報告をする。

「うむ。クライアントからの指示は？」

「彼らに無断での支援はなるべく控えるように、とメッセージが届いています。」

「自立行動を開始したガジェットは私の完全制御下に居る分けじゃないんだ。勝手にレリックの元に集まって行くのは大目に見て欲しいね。」

「お伝えしておきます。」

「彼らが動くならゆつくり観察させて貰うとするよ。彼らもまた貴重なレリックウエポンの実験体なんだからね。」

そう言うともニターを閉じる。

「そしてキミもね……」

そう後ろの二つの影に話しかける。

「さてどうするかな？機動六課、そして『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒト！」

進展（後書き）

シルバ「今回は作者がマジで忙しいためありません。」

潜入！呪われた町、海鳴！（前書き）

遅くなりました。orz

タイトルは気にしないでください（笑

最近、『ネギま！』の二次創作書きたい衝動に駆られています（笑
それでは、どうぞ！

潜入！呪われた町、海鳴！

「ふえ？派遣任務…ですか？」

「しかも異世界に？」

間抜けな声で質問するスバルの後を、引き継ぐようにティアナが訊ねる。

「うん、決定事項。二時間後に出るから、出動準備しておいてね」

「はい！なのはさん。」

「了解です。」

「レリックか、ガジェットの出現なんでしょうか…」

「まだ分からないけど、ロストログア関連では有るみたいだね。」
不安そうに言うキャラロにフェイトが答える。

「はい…」

「まあ前線メンバー全員出動だし、いつもの任務と変わらないよ。」

「エリオもキャラロも平常心でね。」

「はい！」

「俺も行くのかよ…」

シルバがいかにも嫌だ、と言う顔をしながら言う。

「当たり前やろ。」

「俺、今日は非番なんだけど…」

「んなもん関係有らへん！さっさと準備しい！」

「はいはい。」

「おお、みんなお揃いやね。」

フォワード陣から少し遅れて、隊長達がやってくる

「あれ？八神部隊長とヴィータ副隊長？」

「シグナム副隊長にシヤマル先生も…」

スバルに続きキャラも声を上げる。

「私も居るですよ。」

「リイン曹長も…」

「まさか…この全員で出動ですか？」

エリオが訊ねる。

「詳細不明とは言えロストロギア相手だし…主要メンバーは全員出動、って事で。」

なのはが理由を言う。

「あととは行き先がちよつと…ね。」

フェイトが付け足すように言う。

「行き先？何処なんですか？」

「第97管理外世界、現地惑星名称『地球』。」

その名前を聞いてみんなが少しざわつく。

「その星の小さな島国の小さな町、日本海鳴市。ロストロギアはそ

こに出現したそうや。」

「地球ってフェイトさんが昔住んでた…」

キャラが呟く。

「私とはやて隊長はその生まれ。」

「あの…ちよつと良いですか？」

スバルが申し訳なさそうに言う。

「うん？なんや？」

「えつと…シルバが居ないんですけど…」

へりの中

「あんなに言うたのに何で部屋で寝てるんや！」

「いやゝすっかり忘れてた。悪い悪い。」

悪びれもなくシルバが言う。

「はあゝもうええわ。」

その様子にはやても毒気を抜かれてしまい怒る気が失せてしまう。

「第97管理外世界、文化レベルB……」

「魔法文化なし、次元移動手段なし……って魔法文化無いの!？」

「ないよゝ。うちのお父さんも魔力ゼロだし。」

ティアナの疑問にスバルが答える。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

「うん。」

「いや……何でそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなオ
ーバースランク魔導師が？」

「突然変異というか、たまたまゝみたいな感じかな。」

「あ、すいません！」

「気にせんでええよゝ」

驚くティアナをはやては軽い調子で流す。

「私もはやて隊長も、魔法に出会ったのは偶然起こった事件がきつ
かけだしね。」

「……へえ」

「その『偶然』も全部同じ町なんだろう？呪われてんじゃねえの？」

シルバがかなり酷いことを言う。

「……あはは……」

隊長達が乾いた笑いを浮かべる。

「はい、リンちゃんのお洋服。」

シヤマルが子供用の服を持ってやってきた。

「わあ、シヤマルありがとうですゝ」

「あれ、リンさん。その服って……？」

「はやてちゃんの小さい頃のお下がりです」

「言えそうではなくて…着れるんですか？」

明らかにサイズの違う服を見て、キャラが訊ねる。

「あ、フォワードのみんなには見せた事なかったですね。」

「……？」「……」

「システムスイッチ、アウトフレームフルサイズ！」

リンが光に包まれ、エリオとキャラぐらいの大きさになったリンがいた。

「おおー！」

「と、一応このぐらいのサイズにはなれるですよ」

「でかつ！」

「イヤ、それでもちっちゃいけど…」

ティアナが冷静に突っ込む。

「普通の女の子のサイズですね。」

「向こうの世界にはリンサイズの人間も、ふわふわ飛んでる居ねーからな」

「あの…一樣ミッドにも居ないと思います。」

「はい。」

またしてもティアナが冷静に突っ込み、それにスバルが同意する。

「なあ、はやて。」

レグルス達と戯れながらシルバが話しかける。

「なんや？」

「ふわふわ浮いてる小人もだけど…こいつは良いのか？」

「キュクル？」

シルバは自分の膝の上に居るフリードを指す。

「……忘れとったああ！！」

へりの中に、はやての叫び声が響いた。

「取り敢えずフリードはなるべく人前に出さん様にして、もしバレたら人形でおすんや。」

丁度アラームが鳴る。

「八神部隊長、そろそろ。」

ジグナムがはやてに話しかける。

「うん。なのは隊長、フェイト隊長。私と副隊長達はちょっと寄る所があるから。」

「うん、先に現地入りしてるね。」

「「「お疲れさまです!」「」「」

「じゃあな」

「はい」

「「「うん……」「」

「はい、到着です!」

リンの声に4人が目を開ける

「わあ」

「ここが……」

「なのはさん達の……故郷……」

それぞれが感嘆の声を上げる。

「そうだよ。」

「ふふ、ミッドにそっくりでしょ?」

「空も青いし……太陽も一つだし……」

ティアナが呟く。

「山と水と自然のにおいもそっくり……」

「キュクル」

《GAO》

キャロの声に同意するように、フリードとレグルスが鳴く。

「湖……綺麗です。」

「と言うか…ここは具体的には何処なんでしょう…？なんか湖畔のコテージって感じですが…」

「ここは現地の住人の方の別荘なんです。捜査員待機場としての使用を快く許諾していただけたですよ。」

ティアナの疑問にリインが答える。

「綺麗な所だね、シルバ君。…シルバ君？」

キャラはシルバに話しかけるが反応がないので、そちらを向くと…

「オエエエ…」

酔ってダウンしていた。

「ふえええ！？だつ大丈夫！？」

「全然駄目…もう二度と使いたくない…」

「ミッドに戻れないよ！？」

シルバの発言にキャラが突っ込みを入れる。

「と言うか、次元転送で酔う事って有るんですか？」

ティアナがなのはに訊ねる。

「いや…少なくとも私は聞いたこと無いかな…フェイトちゃんは？」

「昔、一度だけ聞いたことが有る気がするけど…」

どちらにせよ、かなり希な例らしい。

「あっ！」

「自動車？こつちの世界にも有るんだ…」

「いえ…文化レベルBですし、有ると思いますよ…」

ティアナ布呟きにエリオが反応する。

「なのは！フェイト！」

「アリサちゃん！」

「アリサ！」

なのは達が、車から降りてきた人物と名前を呼び合う。

「なにももうご無沙汰だったじゃない！」

「にやはは、ごめんごめん。」

「色々、忙しくて。」

「私だって忙しいのよ？大学生なんだから。」

「アリサさん！こんにちはです！」

「リイン、久しぶり！」

「はいです」

「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

フォワード陣が、きょんとしているのに気付いたフェイトが言う。

「アリサ・バニングスです。よろしく」

「……宜しくお願いします！」

「うん。そう言えば、はやて達は？」

「別行動です。違う転送ポートから来るはずですので。」

アリサにリインが答える。

「気持ち悪い……もう帰りたい……」

「キョクル」

「ありがとう……フリード……」

みんなが話している後ろでは、未だに酔いを引きずってるシルバの背中を、フリードが羽を使って器用に撫でていた。

「じゃあ、シルバも復活したことだし改めて任務の内容を簡単に説明するよ。」

「……はい！」「……おう！」

なのはがモニターを出し説明を始める。

「探索地域はここ、海鳴市全域。反応があつたのは……ここと、ここ。」

「……移動してますね。」

「誰かが持つて移動してるか、独立して動いてるか分からないけど……」

ティアナの呟きにフェイトが答える。

「対象ロストログアの可能性は、今のところ確認されてない。」

「仮に、レリックだとしても、この世界には魔力保有者が滅多にい

ないから、暴走の危険はかなり薄いね。」

「とは言っても、相手はやっぱりロストログア。何が起こるか分からないし、場所も市街地。気を抜かずにしっかりいこう。」

「副隊長たちには後から合流してもらおうので……」

「先行して出発しちゃおう！」

潜入！呪われた町、海鳴！（後書き）

シルバ「酔いは万能だ。秘密を開き、希望を深め、無精者を戦場へ
促し、気苦労を取り除き、新しい技術を教える。」

シルバ「ふざけんな！！どこが万能だ！」

キャラ「…分かってると思うけど…これはお酒の酔いだよ？」

シルバ「え…？」

キャラ「分かって無かったの！？」

鳴海市の探索（前書き）

遅くなってすいませんm（――）m
しかもかなり短いです。

なんか学校のテストからの記述&マーク模試の凶悪なコンボを受けて死にかけてました。

感想とか貰えるとうれしいです。

『殺気をぶつける』から『殺気がダダ漏れ』に、『話』から『取引』に訂正しました

鳴海市の探索

「じゃあ、中距離探索は…リインお願いね。」

「お任せです。」

なのはがまずリインに指示を出す。

「クロスミラージユにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから…」
なのははティアナの方を向く。

「そっちとこっちの2人ずつで、少し離れて探索して歩こう。」

「はい。」

スターズの2人が返事をする。

「後は、市内にサーチャーとセンサーを設置…作業としてはそんな感じかな。」

「じゃあ、中距離探索は…リインお願いね。」

「お任せです。」

なのはがまずリインに指示を出す。

「クロスミラージユにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから…」
なのははティアナの方を向く。

「そっちとこっちの2人ずつで、少し離れて探索して歩こう。」

「はい。」

スターズの2人が返事をする。

「後は、市内にサーチャーとセンサーを設置…作業としてはそんな感じかな。」

ちょうど説明が終わると同時にモニターが現れる。

「こちらロングアーチ。こっちも準備万端や。」

つと、忘れとった。」

はやては暇そうにしているシルバの方を向く。

「シルバ君、今回のロストログアって…」

「ああ、レリックじゃないな。」

シルバがどうでも良さそうに返事をする。

あの後、連絡を入れ来て貰ったフェイトさんに訊ねる。

「管理外世界を中心に活動する次元犯罪者だね。私達が来たのを見て慌てたみたいだよ。」

「ふん。」

「じゃあ、管理局への受け渡しもしたし戻ろうか。」

「了解。」

《GAO》

side out

鳴海市の探索（後書き）

シグナム「剣をとるのは、必殺を誓った時のみだ。」

シルバ「作者、zeroビデオの撮ったのに見る時間が無いらしいね。」

キャロ「テストに追われてたからね…仕方がないよ。」

シルバ「いや、まだ一話も見えないからテストだけじゃ無いでしょ。」

キャロ「10月の初めから!？」

聖王暗殺未遂事件！？（前書き）

今回も前回に引き続き短いです。しかもつまんないです。
なんかすいません。

感想とか貰えるとうれしいです。

聖王暗殺未遂事件！？

side シルバ

「……………はっ！！」

いつの間にか寝ていた？らしく意識が覚醒する。

「シルバ君！！よかった〜目が覚めたんだね！」

頭の上からキャロちゃんの声が聞こえる…頭の上？

「えっと…」

確か本で読んだ事がある…膝枕？

「何故に膝枕？」

「え？ふえええー！！」

キャロちゃんは、まるで今気付いかの様に、顔を真っ赤にして慌て出す。

「初々しなあゝ羨ましいわ。」

はやてがニヤニヤしながら近づいてくる。

「まあ目え覚めて良かったわ。」

自分の世界に入ってしまったキャロを無視して話し始める。

「…俺は何で寝てたんだ？」

「正確には気絶やな。理由は…」

はやてが気まずそうに話し始める。

side out

シルバが気絶する数分前に遡る。

「自己紹介も済んだし、そろそろご飯にしよう。」

「一様聞きたいんだが…シャルは手を出してないんだよね？」

シグナムがシャルに問いかける。

「ひっど〜い！」

「大丈夫だ。はやてとあたしが、しっかり見張ってたからな。野菜を切るぐらいしかやってない。」

シヤマルでは無くヴィータが答える。

「まあそれぐらいなら……」

「もしかして……シヤマル先生って……」

3人のやり取りを見ていたスバルが呟く。

「違う！シヤマル先生、料理が下手じゃないの！」

シヤマルが抗議の声を上げる。

「それにしっかり私も作ったわよ！」

「何！？」

「いつの間に！？」

ヴィータとはやてが驚きの声を上げる。

「なあ、この虹色のやつなんだと思う？」

「……少なくとも食べ物じゃない気がするよ……」

はやて達が揉めている後ろで、シルバとキャロが話していた。

「まあ食卓の上に有るんだし、大丈夫だろ。」

「アレは絶対ダメだよ！」

キャロの忠告を無視してシルバが虹色の何かを口に入れる。

次の瞬間……

「バタン」

「シルバ君！？」

シルバが倒れた。

「……と言う事があつたんよ。」

はやてがシルバに説明する。

「……はやて、機動六課は暗殺もするのか？」

シルバが真面目な顔で訊ねる。

「……今の所その予定は無いんやけど……」

はやては苦笑しながら答える。

「取り敢えず、まだ食べてないのはシルバだけやからさっさと食べてな。」

「そう言えばみんなは何してるんだ？」

シルバが訊ねる。

「今はシルバを待ちがてら花火をしとるよ。」

「花火？」

「なんや、知らんのか？見れば分かるよ。」

「いろんな色が出たりして、綺麗だな……」
シルバが呟く。

「それは色が変わるやつやな。他にもいろんな種類があるから、みんなも好きなのやてな。」

「……はい！」「……」

フォワードの四人が元氣よく返事をする。

「はやて！コレ火付けても何も出ないぞ。」

「ああ、湿気つてもうたやつは火が付かな……」

はやては、よくある可能性を頭に浮かべながら振り返る。

「なっ！？」

そこには地面に置いて火を付けるタイプを手を持ったシルバが立っていた。

「アホー！！それは手で持ってやるやつ違うわ！！今すぐそれ離し……い……！」

はやてがシルバに怒鳴るがすでに遅く。

「へ？ひつちっ！？！？」

吹き出た花火をモ口にくらいシルバが意味の分からない悲鳴をあげた。

「と言う訳で、さつき火傷して湖に飛び込んだ子も居るし、折角なのでサーチャーの反応に注意しつつ、スーパ―銭湯…簡単に言うと大きいお風呂屋さんに向かいます。」

フェイトがこれからの方針を言う

「バーベキューしたり、花火したり、銭湯行ったり…なんか仕事かなのに休暇みたいになってもうたな。」

「職務怠慢だな。」

はやての言葉にシルバが返す。

「あんたにだけは言われとう無いわ!!」

聖王暗殺未遂事件！？（後書き）

シャル「ポイズンクッキング！！溶解さくらもち！！」

シルバ「マジで今回は死ぬかと思った…」

キャラ「私が食べちゃダメって注意したのに食べるからだよ。」

シルバ「実はあれ、食べたくなって食べたんじゃないんだ。」

キャラ「え？じゃあ何で食べたの？」

シルバ「いや、作者が『食事の時の自己紹介メンドイから…』って。」

キャラ「そんな裏事情言わないで！！」

スライムもりもり、衝撃の機動六課！（前書き）

なんかキャラが…崩壊してる気がする…

かなり無茶苦茶かもしれませんが。なので細かい事は気にしないで下さい。

感想書いてもらえるとうれしいです。

このタイトル大丈夫かな…少し不安…

スライムもりもり、衝撃の機動六課！

「はいー！いらっしやいませー！海鳴スパクーアツーへよう…団
体様ですか？」

大人数の客を観て店員は驚いて止まったが、すぐに復活した。

「えーと、大人12人と…」

「子供5人です。」

はやてとフェイトが人数を店員に言った。

「シルバとエリオとキャロと…」

「私とアルフです！」

ティアナの言葉ををリインが引き継ぐ。

「おー！」

アルフは嬉しそうに返事をする。

ちなみに獣耳などは仕舞っている。

「グイータ副隊長は？」

スバルはグイータに訊ねる。

「あたしは大人だ！」

グイータが不機嫌そうに言った。

「冗談キツいぜ…グウ！？」

シルバが呟いた瞬間、グイータの拳がシルバの腹に決まる。

そんなやり取りを見ていた周りの人達の顔は、若干引きつっていた。

「お会計しとくから、さき行つてな。」

『はい！』

はやての言葉に全員が声を揃えて返事をする。

中にはいるとエリオは、お風呂が分かれていることを確かめる。

「……ああ。よかった、ちゃんと男女別だ」

エリオはホッとしながら言った。

「広いお風呂だって。楽しみだねシルバ君、エリオ君！」

「あ…うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて。」

エリオは律儀に返事をする。

「え…2人とも？」

悲しそうに言うキャラにエリオが返事をする。

「ぼ、僕達は…ほら一応、男の子だし」

「一応じゃなくて普通に男だ。少なくとも俺は。」

「ん…でもほら、あれ。」

エリオはキャラが指さす方の注意書きに目を通した。

「注意書き？ えっと…女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願い…します。」

「ふふッ、エリオ君達10歳！」

間髪入れずにキャラが言う。

「え！？ あ…」

「いや、俺は…」

「うん。せっかくだし、一緒に入ろうよ」

シルバ達の声を遮ってフェイトはキャラに援護射撃を送った。

「フェイトさん！」

キャラは嬉しそうにフェイトを見る。

「いや、だから俺は12歳なんだって！」

シルバが2人に言う。

「え…？」

そのままキャラはフリーズしてしまふ。

「そう言うわけで、連れて行くのはエリオだけにしてくれ。」

エリオが生け贄に差し出す。

「シルバまで！？ いや、あ、あのですね…それはやっぱり、スバルさんとか、隊長達とかアリサさん達もいますし！」

エリオは必死に断ろうとするが…

「別に私は構わないけど？」

ティアナはあつさりと承諾。

「てゆーか、前から、『頭洗ってあげようか?』とか言ってるじゃない」

どうやらスバルは前から誘っていたらしい。

「う…」

エリオは段々逃げ場が無くなっていく。

「私等もいいわよ。ね?」

「うん」

「いいんじゃない? 仲良く入れば?」

結局全員から女湯入浴許可がおりてしまう。

「そうだよ。エリオと一緒に風呂は久しぶりだし、入りたいなあ…」

フェイトにとどめを刺され、エリオは抵抗することが出来なくなつた。

「そつそうだ! シルバ! って居ない! ?」

「シルバなら先に入っちゃったよ?」

シルバに助けお求めようとするがそのシルバはすでに入ってしまったらしい。

「じゃあ、行こうか。」

結局エリオはフェイトに連れて行かれてしまった。

その後ろで…

「えつと…」

やっと復活したキャラが注意書きを見ていた。

「うゝん…」

シルバはロッカーの使い方が分からず困っていた。

「どうかしたか? 坊主。」

「いやゝコレの使い方が分からなくてな。」

「なんだ此処には始めてきたのか？」

そう言いながらシルバに教えていく。

「他に分からないことがあったら、その説明書を読み。」

「ありがとう、助かった。」

シルバは礼を言うと服を脱ぎ始める。

「エリオが来ないところを見ると連れて行かれたか…」

シルバは浴室に入りながら呟く。

「えっと、注意書きは…コレか。」

しばらく眺めてから言う。

「読めない…」

デバイスを外したため、翻訳魔法が切れてしまったのだ。

「私が読んであげようか？」

唸っているシルバの後ろから聞き慣れた声が聞こえる。

「ああ、頼む…？ってキャラちゃん！？」

後ろを見て驚愕の声を上げる。

「私、10歳！」

胸を張りながらキャラ口が言う。

「いや、意味が分かん。」

「えっとね、10歳なら女の子も男湯には入れるんだって！」

キャラ口が説明する。

「ふーん、でも良かったのか？フェイトさんやエリオと一緒にじゃなくで。」

「大丈夫！露天風呂は混浴らしいから、そこから女湯にもいけるし！」

キャラ口は嬉しそうに言う。

「そうなんだ…」

それを聞いたシルバは、いな予感をおぼえるのだった。

「そう言えば、さっきの注意書き何で読めたんだ？」
シルバは一緒にお湯に浸かっているキャラに訊ねた。
「昔フェイトさんに無理を言って教えて貰ったの。」
「しばらく一緒に生活してたって言ってたが、フェイトさんの養子なのか？」
「うーん…ちよつと違うけどそんな感じ。」
キャラを少し悩んでから言った。
「家族か…」
シルバが少し寂しそうに言う。
「…」
キャラはそれを見て少し考えて。
「次は露天風呂！」
「…は？」
「だから露天風呂！ほら行こ！」
「いや、俺は…」
キャラはシルバを引きずって行った。

「あゝ、こつちの世界のお風呂はエンターテイメントだね」
「ふうゝ、まったく。」
ティアナとスバルとエリオは露天風呂に居た。
「あの…僕はそろそろ男湯に…」
「ダメ。」
エリオはスバルに拒否されて肩を落とす。
「スバルさゝん！ティアさゝん！エリオくゝん！」
「頼むから離して！」
そこにシルバの手を引っ張ってキャラが来た。
「シルバ！何で僕を置いてったの！ー！」
「チッ！まだ覚えてたか…」

エリオはシルバに詰め寄る。

「そっかゝ此処って混浴だったんだ」

スバルが思い出した様に言った。

「っ！俺は12だって言っただろ！女湯行けるわけ無いだろ！」

「そうだけど何も置いていくこと無いじゃないか！」

2人の言い合いがどんどんヒートアップしていく。

「2人とも喧嘩しちやダメだよ」

キャラが止めにはいるが…

「キャラちゃんは黙ってて！」

「う」

シルバに一蹴されてしまう。

「と言うか…何でシルバはキャラだけ『ちゃん』付けなの？」

スバルが言う。

「そう言えばそうね。何でかしら…」

「シルバ君！」

スバルとティアナの話が聞こえたキャラはシルバに詰め寄る。

「何で私だけ呼び捨てじゃないの？」

「えっ？いや…深い意味は無いけど…」

キャラの気迫に圧され、2人は言い合いを中断する。

「何か距離を感じるから私も呼び捨てにして！」

「いや…何？突然？」

「ダメ…？」

シルバはよく分からず頭を傾げていると、キャラが少し目に涙を溜めて言う。

「うつ…分かったよ、キャラ。これで良い？」

「うん！」

さっきまでの涙目を消してキャラが嬉しそうに言った。

「…ティアもしかしてキャラってシルバのこと…」

「多分そうだと思うわ…」

後ろでスバルとティアナが小声で話していた。

みんなが銭湯から出て歩いていると、突然ケリユケイオンとクラールヴィントから警告音が鳴り響く。

「ケリユケイオンが…」

「クラールヴィントに反応…リインちゃん!!」

「はいです! エリアスキャン…ロストログリア反応キャッチ!!」

「おっ! お仕事だね。みんな、頑張ってきて!」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけて行ってこいよ?」

「はいっ!」

エイミイとアルフの言葉に、エリオ達が嬉しそうにうなづく。

「じゃあティアナ。シャル先生とリイン、はやて隊長にオプティックハイド、よろしくね。」

「了解です。」

「空に上がって結界に閉じ込めるから、その中で捕まえてね。」

「……はいっ!」

「ほなら、スターズとライトニング、出動や!」

「打撃無効!？」

「斬撃も無効です!」

「魔力弾も効果無し!」

フォワードの四人が苦戦しているのを、はやての隣で見ていたシルバは突然ティアナに通信を繋いだ。

「聞こえるか? ティアナ。」

「何よシルバ! 今は取り込み中よ!」

トゲのある言葉でティアナが返す。

「ちょっとした助言だ。アレは危機を感じると分裂すると聞いているだろ? ならば逆に分裂させない方法は? 何故結界に閉じこめた?」

「どういう意味よ！もつと分かり易く言いなさいよ！」
ティアナが若干怒り気味に言う。

「ああ、それと最後に一つ。お前は少し頭で考えすぎる。たまには力任せに行ったらどうだ？」

そう言うのとシルバは一方的に通信を切った。

「意味分らない事ばかり言っつて、一方的に切るんじゃないわよ！」

ティアナは恨み言を言いながらも頭を働かせる。

（分裂しない方法…アレは危機を感じると…）

そこまで考えてハッとしたように顔を上げる。

（危機を感じさせない…つまり攻撃しなければいいんだ！でもならどうやって捕まえる？）

ティアナはシルバの二つ目の助言を考える。

（結界を張った理由は、勿論町の方にアレを逃がさない為…そうか！）

「リイン曹長！こちらを手伝って貰えませんか！？」

「大丈夫ですよ、ティア！」

それを聞くとティアナは次の指示を出す。

「スバル！エリオ！攻撃を一旦中止して下がって！」

「「え？」」

「いいから速くする！」

二人が下がったのを見ると、即座にリインに合図をする。

「リイン曹長！」

「ヴァイヒ・スツーツー！」

ティアナの合図を聞き即座に魔法を発動する。

スバル達が一ヶ所に集めていたスライムを囲むように白い支柱が現れる。

「キャロ！」

「はい！錬鉄召喚……！」

さらに現れか支柱の周りにキャロの鎖が巻き付き即席の檻を作り上

げた。

（またには力任せに…）

「キャラ、私にブーストをお願い！」

「分かりました！我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力を！」

「力任せに…閉じ込めた分身ごと本体を封印する！」

ティアナはそのまま簡易封印魔法を放つ。

「シーリング…」

「「シュート！！」」

「封印確認！」

ラインの声を聞くと…

「もうダメ…」

そう言うときティアナは仰向けに倒れた。

「これにて出張任務終了や。お疲れさま。」

「じゃあ、私は新しく入ったスカリエッティの情報を受け取りに本局に寄っていかなくや行けないから。」

フェイトははやてに言う。

「ほんなら此処で別れよっか。お疲れさまや。」

「うん。はやくもお疲れさま。」

そう言うときフェイトは歩き出した。

「ドン」

「あつすいません！」

しばらく歩いた所で誰かにぶつかってしまった。

「いや、こちらこそすまない。」

そう言うとき立ち去った男は、小さい女の子を連れ茶色いフード付きのロングコートを着ていた。

スライムもりもり、衝撃の機動六課！（後書き）

シルバ『現状をよく踏まえた上で、その多面的な要素とやらから必要と思われる一面を考える。知識ではなく知恵を振り絞れ。』

キャラ『今回でサウンドステージ編も終了！次回からはホテル・アグスタ！』

シルバ『と思うだろ？実はもう一話、間に作るらしい。今回の最後のはその為の伏線らしい！』

キャラ『いやいや、早く本編に戻ろうよ……』

会議と黒幕の陰（前書き）

いつの間にかPVが1万を超えていました…

感謝感激雨霞です！！

今回はいつも以上に話が無茶苦茶です…

生温かい眼で見逃して下さい。

感想もらえるとうれしいです

会議と黒幕の陰

side シルバ

「会議？何で俺も出るんだ？」

「聖王教会の代表としてや。今は入ってる情報の交換やな。」

出張任務が終わった日の翌朝、俺ははやてに呼び出された。

「ああ…そう言えば昨日フェイトさんが受け取りに行くとか言ってたな…」

「そ、この前シルバ君が持ってきたのも関係有りそうやしな。」

「了解だ。今からか？」

「そうや。」

「ごめんな、遅くなって。」

はやてが謝りながら会議室に入る。

「あれ？シルバ君も参加するの？」

「聖王教会の代表としてな。」

なのはさんの質問に答える。

「ほな始めよか。」

「まずは私から。前回のリニアレールの時に破壊したガジェットの画像から、少し気になる事が書いてあるのが分かったの。」

フェイトさんがモニターを操作しながら説明を始める。

「この画像の中心にある物…」

「ジュエルシード!？」

画面に映った物を見て、なのはさんが声を上げる。

「うん。コレについては現在、無限書庫の方に問い合わせている所。次にこの金属プレート…」

今度は先程の宝石の斜め上が拡大される。

と、ちょうどその時…

「失礼します。」

制服を着た女性が入って来た。

「何や？今は会議中やで？」

はやてが不愉快そうに言う。

しかし俺をそれ所ではない。

（此奴は…）

思わず動きそうになってしまつのを我慢する。

「すいません。頼まれていたお茶をお持ちしました。」

「お茶？そんな物頼んだ覚えはないで？まあええわ。」

それを聞くとお茶を配ろうとする。その瞬間、

「ドゴオオオン！！」

side out

「ガハ！？」

シルバは一瞬で女に近づくと首を掴み壁に押しつける。

「ちよっ！？シルバ！？」

はやてが何か言うがシルバは無視をする。

「よく俺の前に顔が出せたな？クソやろう！」

「何を言つて…」

「気付かないとでも思つたか？テメエ…いやテメエ等が体ん中に入
れてる結晶が、本来は誰の物が忘れたのか？」

女の言葉を遮つて言う。

「まあ良い、取り敢えずコレは返して貰うぞ。」

そう言つて相手の胸の前に手をかざす。すると、黒い孔が開きそこ
からレリックがゆっくりと現れる。

「なっ！？」

そこにいる全員が驚きの声を上げた。

「クツ!？」

女は焦って抜け出そうと暴れるが、シルバがそれを許さない。そして遂に完全に外に出たレリックをシルバが掴み、側に控えていたレグルスに渡す。

「それはドクターの物だ!!返せ!!」

そう女が言った瞬間、殺気がその場を支配する。

「返せ?人の家の者を勝手に盗み出した分際で…盗人猛々しいぞ!」

シルバは吼えると同時に全力で拳を放つ。

しかし女は壁から出て来た手に掴まれ壁に吸い込まれるように消える。

「ッ!？」

「ドガアアァン」

シルバの拳はそのまま会議室の壁を破壊し、隣の部屋を半壊させた。

「チッ…逃げられたか…」

「今のは…?」

はやてがシルバに訊ねる。

「…少なくともレリックを無断利用してる奴と関わりがある奴だ…」

「…心当たりは?」

「…それだと思われる情報は持っている。」

「りょーかいや。」

そう言うのと半壊した会議室から会議の場所を変えるように全員に指示を出した。

「つまり、そのジェイル・スカリエッティって奴が今一番怪しいわけだ。」

フェイトの説明が終わるとシルバが言う。

「そう言うことになるかな。」

「…もしかして、そいつドクターとか呼ばれているか？」

シルバが少し考えた後言う。

「？うん。『ドクター ジェイル・スカリエッティ』って呼ばれているけど…どうして？」

「さっきの奴が それはドクターの物だ！！ って言ってたからな。」

シルバが忌々しそうに言う。

『何！？』

全員の声が重なる。

「ほんなら…」

「十中八九、そいつで間違いないだろ。」

全員が息をのむ。

「…さっき情報が有る言うてたやろ？」

はやてがシルバに訊ねる。

「コレとは関係ない調べ事をしていたときに手に入れた情報だ。」

そう言うとは今度はシルバがモニターを操作する。

「…さっぱり分からんのやけど…」

はやてがシルバに言う。

「ああ、今から説明する。」

・ 説明中

「つまり、これはレリックを利用した時に出るエネルギー言うことか…でもそんなん、何の関係があるんや？」

「まあ、これを見てくれ。」

モニターには銀色の髪少女が片目から血を流しながら立っている画像が映る。

「これは…」

「八年前にとある『人造魔導師』の施設を破壊しに向かった部隊が壊滅させられた時の画像だ。コレがこの小娘のスキャンデータだ。」

モニターに新しくグラフが追加される。
「さっきのレリックを取り込んだ時のエネルギーと同じ…」
なのはが呟く。

「つまり相手はレリックを使ってパワーアップしてる言うことが…」
「そう言うことだ。」

シルバが答える。

「ねえ…シルバ？」

「何だ？」

フェイトが顔をしかめながら言う。

「この男性の顔…拡大して貰える？」

「？」

シルバは不思議そうにしながらも言われた通りに拡大する。

「やっぱり…私この人に昨日会ったよ。」

「……………」

沈黙が部屋を支配し、

「何だと!？」

一瞬後にシルバの叫び声が上がった。

おまけ

「あつ、会議室の修理代はシルバの給料から引くから。」

「またかアアア!!」

会議と黒幕の陰（後書き）

シルバ「悪リイが…こつから先は一方通行だ 侵入は禁止ってなァ
！！」

シルバ「あの他人に化ける奴って何番目だっけ？」

キャロ「確か…2番目？」

シルバ「じゃあ『風のアーウェルンクス』だな。」

キャロ「なんの話！？」

シルバ「え？咬ませ犬。」

ホテル・アゲスタ（前書き）

なんか色々セリフが飛んでる気がする…
まあ気にしないで下さい。

今回はいきなり三人に正体をばらします。

『ネギま』と『バビル2世 ザ・リターナー』の最新刊を買いに行く暇がない…orz

ホテル・アグスタ

「ほんなら、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。

これまで謎やったガジェットの製作者及びレリックの製作者は、現時点ではこの男。」

モニターに一人の男の顔が映る。

「違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者：ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める。」

「こつちの捜査は主に私がするんだけど、みんなも一応覚えといてね。」

フェイトが付け足すように言う。

「……はい！」「……」

「で、今日これから向かう先はここ《ホテル・アグスタ》」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護それが今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストログアが幾つも出品されてるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来ちゃう可能性が高いとの事で私達が警備によられたです。」

リンとなのはが交互に言う。

「この手のオークションは密輸品取引の隠れ蓑になったりするから、色々油断は禁物だよ。」

フェイトが注意を促す。

「現場にはすでに昨夜からシグナム副隊長にヴィータ副隊長、他数名の隊員が張ってくれてる。」

「私達は建物の中の警備にまわるから、前線は副隊長達の指示に従ってね。」

はやてとなのはが警備についての詳細を説明する。

「……はい！」「……」

「あの…八神部隊長？」

「どうしたんやエリオ？」

「シルバは…」

「ああ、…シルバなら今は聖王教会やな。どつかのお気楽査察官の手伝いやと。」

「お気楽…」

「査察官？」

ティアナとスバルが首を傾げる。

「あの、シャル先生…さっきから気になってたんですが、その下の箱って？」

キヤロがシャルの隣にある箱を指して言う。

「ん？ああ、これは隊長達のお仕事着。」

「んで？俺の事は何て聞いてるんだ？」

シルバは隣を歩いていて緑の髪を腰まで伸ばした青年に尋ねる。

「貴方がオリヴィエ陛下の隠し子だと言う事は。」

緑髪の青年…ヴェロッサ・アコースが答える。

「そのことを知っているのは？」

「今の所は、義姉さんと僕、それとシャツハの3人です。」

「全員カリムの身内か…まあ、カリムの身内なら大丈夫だろ。それと無理に丁寧語を使う必要はないぞ？」

使い慣れてないだろ、とシルバが付け加える。

「バレましたか…ではお言葉に甘えて。」

ヴェロッサが苦笑いしながら言う。

「しかし…この服はどうにかならないのか？動きにくくて仕方がない。」

「それは仕方がないさ。そう言う場所に行くんだから。」

「にしても…だ。何でわざわざ大人の姿にならなきゃ成らないんだ！！」

そう。今シルバは大人モードに黒いスーツを着た状態なのだ。

「いや…流石に子供の姿では入れないよ。」

そう言いながらヴェロツサは、叫ぶシルバを宥める。

「アコース査察官！」

「先生！」

2人が話していると薄い青年がやってきた。

「この人が…か？」

「ああ、無限書庫の司書長 ユーノ・スクライア先生だ。」

ヴェロツサがシルバに説明する。

「えっと…彼は？」

「ああ、すまない。聖王教会教会騎士団騎士 シルバ・メルゼー…

いや、あなたには協力して貰った方がいいか…」

「良いのかい？」

シルバの呟きにヴェロツサが確認するように言う。

「ああ、あの無茶苦茶デカイ図書館の管理者だろ？予言関係で俺の手伝いを頼みたいからな。」

「分かったよ。」

そう言つてヴェロツサは一步下がる。

「え」と…

訳が分からないと言う顔をしているユーノに向き直る。

「はじめまして、俺は聖王女オリヴィエの息子、シルバゼーゲブレヒトだ。」

side ティアナ

『でも今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か…』

『そうね。あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長とか副隊長たちの事。』

念話でのスバルの呟きに返事をする。

『うん。父さんやギン姉から聞いた事ぐらいだけど…』

八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が夜天の書って言うこと。

副隊長たちとシャル先生、ザフィーラが八神部隊長個人が保有してる特別戦力だったこと。

で、それにライン曹長を合わせて6人揃えば、無敵の戦力だって言われてる事。

まあ八神部隊長の出自とか能力とかは特秘事項になってて、私も詳しくは知らないけど…』

『レアスキル持ちの人は皆そうよね…』

『ティア、なんか気になるの?』

私の呟きが聞こえたのか、スバルが不思議そうに言う。

『別に。何でもないわ。』

念話を切り先程の話を考える。

六課の戦力は無敵を通り越して異常だ。八神部隊長がどんな裏技使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバース、副隊長でもニアSランク。他の隊員たちも未来のエリートばかり…

あの年でもうBランクを取ってるエリオに、レアで強力な竜召喚士のキャロ。シルバなんかリミッター付きとは言えシグナム副隊長と戦えるレベル…

やっぱり、凡人は私だけか…

だけど、そんな関係ない。私は、立ち止まる訳にはいかないんだから…!

side out

ホテル・アグスタの側の森に2人の人物がいた。

「あそこか…お前の探し物は、此处にはないのだろう?何か気になるのか?」

「…うん…」

茶色いコートの男に紫色の髪の少女が応える。
その少女の指に、銀色の虫が止まる。

「ドクターのおもちやが近づいてきてるって…」

「ッ！クラールヴィントに反応！シャーリー！」

クラールヴィントから警告音になり、シャマルは直ぐにシャーリーに確認を取る。

「はい！…ガジェットドローン陸戦？型、機影30…35！」

「陸戦？型、2…3…4！」

「エリオ、キャロ。お前たちは上に上がれ。ティアナの指揮でホテル前に防衛ラインを設置する。」

「はい！」

エリオとキャロが返事をする。

「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ。」

「心得た。」

「えっ！？ザフィーラって喋れたの！？」

「ビックリ…」

「守りの要はお前たちだ。頼むぞ」

驚いている2人にそのまま話しかける。

「前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合管制と合わせて、私、シャマルが現場指揮を担当します。」

「スターズ3、了解！」

「ライトニングF、了解！」

「スターズ4、了解！」

フォワード達が返事をし、現場に向かって走る。

「シャマル先生、私も前線の状況を見たいんです。映像を繋いで貰えませんか？」

「了解。クロスミラージュに直結するわ。クラールヴィント、お願いね。」

クロスミラージュに映像が送られる。

シグナムとヴィータもデバイスを起動し、前線へ向かっていた。

「新人たちのいる防衛ラインまでは、一機たりとも通させねえ。速攻でぶっ潰す！」

「お前も案外過保護だな……」

「うるせーよ！」

ホテル内でフェイト達が念話で連絡を取り合っていた。

「フェイトちゃん、主催者さんはなんだって？」

「外の状況は伝えただけ……お客の避難やオークションの中止は困るから、時間を遅らせて様子を見るって。」

「そう……」

シグナムやヴィータ、ザフィーラが各々ガジェットを撃破し、森から爆煙が見えている。

「副隊長たちとザフィーラ、すごい！」

「……これで、能力リミッター付き……」

スバルが無邪気にはしゃぐなか、ティアナはどこか悔しそうに手を

握り締めていた。

森から爆煙が立ち上るのを見ていた男と少女の下に通信が入る。

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア。」

「ごきげんよう…」

「…何の用だ」

ルーテシア、と呼ばれた少女は無表情に返事を返す。一方ゼストと呼ばれた男は機嫌悪そうに言う。

スカリエツティはそれを気にしたそぶりもなく、狂氣的な笑みを浮かべたまま言う。

「冷たいね。近くで状況を見ていたんだろう？あのホテルにレリックはないが、実験材料として興味深い物がひとつあるんだ。協力してくれないかい？君たちなら、実に造作もないはずなんだが…」

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ゼストは不快感を隠さずに即答する。スカリエツティはルーテシアに視線を移す。

「ルーテシア、君はどうだい。頼まれてくれないかな？」

「…いいよ」

「優しいな。ありがとう。今度ぜひ、お茶とお菓子を奢らせてもらうよ。君のデバイス、アスクレピオスに私の欲しいもののデータを送った。」

「…うん。じゃあ、ごきげんよう、ドクター」

「ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ。」

「…いいのか？」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、わたしはそこまでドクターを嫌ってないから…」

そう言つとルーテシアはデバイスをかざし、詠唱を始めた。

「我は乞う。小さき者、羽ばたく者、言の葉に応え、我が命を果たせ。…召喚。ウンゼクトズーク」

ルーテシアの周りに、銀色の虫が多数出現する。

「ミッシヨン、オブジェクトコントロール…いつてらっしゃい、気を付けてね…」

「ッ!？」

イスに座り船を漕いでいたシルバは突然立ち上がる。

「どうしたんだい?いきなり。」

「レリック…この感じは組み込まれてるのか。」

ヴェロッサの声に反応せず呟く。

「悪いな、ヴェロッサ…少し用事だ!」

「へ?」

銀色の虫が取り付くと同時にガジェットの動きが変化する。

「なに!？」

シグナムは自分の剣を受け止めたジェットに驚きつつ、一度後退する。

「こいつら、急に動きが良くなりやがった。」

「自動機械の動きじゃないな…」

ヴィータとシグナムが合流し話していると、シャルルから連絡が入る。

「どうやら、有人操作にきりかえられたみたいね。」

「そうか…ヴィータ、一度下がれ。新人たちのほうへ回り込まれるかもしれない」

「わかった！」

「ザフィーラはシグナムと合流して！」

「心得た」

シグナムがヴィータを下がらせ、シャマルが指示を出す。

突然ケリユケイオンの警告音を発した

「え？」

「どうしたのキャロ……」

「近くで誰かが、召喚を使っている……」

「クラールヴィントのセンサーにも反応。だけど、この魔力反応って……」

「お、大きい……」

ロングアーチのセンサーでも魔力反応をキャッチしていた。

ホテル前に集まったスバルたちの前に、ガジェットが転送されてくる。

「あれって……召喚魔方陣！？」

「召喚魔法ってあんなこともできるの！？」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです！」

驚くスバルとエリオにキャロが答える。

「何でもいいわ。迎撃するわよ！」

「……おう！」「……」

ティアナの指示に皆が構える。

「くっ！」

なかなか減らないガジェットにティアナが忌々しげに舌を打つ。

「皆、もう少し持ちこたえて！ヴィータ副隊長がもう少して合流す

るから！」

その言葉を聞きティアナが顔をしかめる。

「守ってばっかじゃ行き詰ります！ちゃんと全機落とします！」

シャマルの声はティアナの耳には入らなかった。

「どんな敵だつて、撃ち抜けるんだつて！！」

ティアナの腕に、カードリッジを消費したことで生まれた魔力がま
とわりつく。

「クロスファイヤー…シュート！」

オレンジの魔力弾がガジェットを貫いていく。

「あああああああつ！！」

ティアナがむしゃらに撃ち続ける。

そのうちの一発が逸れ、スバルに飛ぶ。

「っ！？スバル！」

「えっ！？」

スバルが振り向くが、遅い。ティアナの弾丸はスバルに…

ホテル・アゲスタ（後書き）

シルバ「問おう　貴方が私のマスターか？」

はやて「召喚したのはキャラやな。」

キャラ「でも私は正義の味方を目指してませんよ？」

シルバ「まず俺が剣使ってないし…」

はやて「そこら辺は気にしたらあかん！！」

シルバ「つーか、今回の服装だって作者がZERO見て思いついたんだろ？絶対似合ってねーよ！」

キャラ「大丈夫！かつこいいよ！！」

シルバ「ありがと。キャラも今度ドレス着てみたら？きっと似合うよ。」

はやて「うち泣きそうや…」

それぞれの目的（前書き）

今回もかなり滅茶苦茶に仕上がってます。はい。

シルバの口調が若干安定してません。

エリオとルーテシアを絡ませるために若干無理をしました。気にしないで下さい。

感想などを頂けるとうれしいです。

それぞれの目的

スバルは自分に向かってくる魔力弾から目を逸らすことが出来なかった。

しかし、魔力弾はスバルにぶつかる直前にヴィータによって地面へたたきつける。

「ヴィータ副隊長……！」

スバルが驚いたように言う。

「ティアナ、このバカ！無茶やった上に味方を撃ってどうすんだ！

！」

「あ……」

ヴィータの怒鳴り声が、呆然としているティアナに浴びせられる。

「あのヴィータ副隊長……今のも、その……コンビネーションのうちで

……」

「フザケろタコ……！直撃コースだよ……！今のは……！」

スバルがティアナをフォローしようとするがヴィータに遮られる。

「違うんです！今のは私が……」

「ヴィータ副隊長！後ろに……」

なおも食い下がろうとするスバルの声は今度はキャロの悲鳴の様な声に遮られた。

「なっ……！」

振り返ると、先程倒し損ねた？型のミサイルが襲いかかってきていた。

ヴィータだけなら避けることが出来たかもしれないが、隣にはスバル、そしてその直線上にはティアナが居た。

「クッ……」

「え？何この状況？」

どうにか打開策を考えるヴィータの耳に今日は居ないはずの少年の声が聞こえた。

「まあ取り敢えず…」

《メルゼズ・ランス》

襲いかかってきていたミサイルは黒い流星によって爆発せず（・・・）に破壊された。

「シルバ…」

「何か壮大な仲間割れの最中つばいな…」

「おいシルバ！何でお前が此処に居んだよ！」

「え？何？なんで俺怒られてんの？」

ヴィータに怒鳴られたシルバは不思議そうに言う。

「と言うかマジで急ぎの用が有るから！また後でな！」

「おい！ちよつと待て！」

ヴィータの声を無視してシルバは森に向かって駆けていった。

「うん、ガリユー…ミッションクリア。じゃ、そのままドクターに届けてあげて…」

「品物は何だったんだ？」

「分かんない…オークションに出す品物でなくて、密輸品みたいだけど…」

「そうか…」

ホテルの方を見ると爆炎も収まり、戦いの終わりを告げていた。

「戦いも、もう終わりだ。前線の騎士達がなかなか良い戦いをした。さて、お前の捜し物に戻るとしよう。」

「…うん。」

「その捜し物つてのはレリックか？」

その場を去ろうとした2人に突然声かけられる。

「ッ！？」

ゼストはルーテシアを庇う様に前に出てデバイスを構える。

「そう身構えんなよ、騎士ゼスト。」

「…シルバ・ゼーゲブレヒト…」

「やっぱり俺の名前を知っているか…」

シルバは呟く。

「…何のようだ？」

「ん？ああ、勧誘だよ。」

「勧誘？」

ゼストは訳の分からないと言った顔をする。

「そ、勧誘。今俺は母上…聖王女オリヴィエに仕えていた騎士達の子孫を探しているんだ。」

「…その内の1人が俺だと？」

ゼストは訝しげに言う。

「正確には、そのルーテシア・アルピーノもそうだ。」

「…断つたらどうするつもりだ？」

「どうもしないが？」

「…何故だ？」

「嫌がってる奴を無理矢理仲間にしても意味がないからな。」

ゼストの問いにシルバは当たり前のように答える。

「それをどう信じると？」

「そうだな…まず俺の話を聞いてから決めてくれ。」

「…いいだろう。」

「俺はこの時代に来てから、現状を把握するために様々な情報を集めた。」

この時代はベルカのような国と国の大きな争いは無く一見平和に思えた。だが実際は、本来仲間であるはずの組織同士がにらみ合っている…俺はそれを止めたい！

かつての…ベルカのような灰色の空は作りたくない！

その為に力を貸してもらいたい！

ゼストはデバイスを下ろし少しの間考え込む。

「…条件がある。」

「何だ？出来る事なら叶えるぞ？」

「レリックを…??番のレリックを渡してほしい。」

ゼストの言葉にシルバは目を細める。

「アレが何か分かっていつて言ってるのか？」

もしドクター・ジェイ…ジェル…ドクター何とかの実験のためなら

…」

シルバはそう言いながら殺気を放つ。

「…それは言えない。少なくとも奴の為ではない。」

「…ゼスト。私が話す。」

今までゼストの後ろに隠れていたルーテシアが話に加わる。

「…良いのか？」

「うん…この人は信用できる。なんでか分かんないけど…そんな気がする。」

「…分かった。」

そう言つてゼストは一步下がった。

「私がレリックを探しているのはお母さんを起こす為…」

「…どういう意味だ？」

「この子の母親を生き返らせる為には??番のレリックが必要と言う事だ。」

シルバは眉を顰める。

「生き返らせる?レリックで?そんなこと誰が言っただ？」

「ドクター。」

「話にならない。」

「…何だと？」

シルバの言葉にゼストが聞き返す。

「いいか?レリックつてのは歴代聖王の力の結晶だ。身体能力や固有能力の強化、機械の動力源には出来ても、死者蘇生なんて事は絶対に出来ない。」

「そんな…」

ルーテシアは絶望したように座り込む。

「待て…ならば何故私は生き返った？」

「それは知らん。少なくともレリックの力ではない。」

「…」

ゼストはそのまま黙り込んでしまった。

「…その母親の居場所は分かるのか？」

「ああ。」

ゼストが絞り出すような声で答える。

「ならば交渉だ。」

「交渉？」

「ああ。母親の所に連れて行け。もし俺が…聖王教会が助ける事が出来たら俺に協力しろ。」

「…俺は構わない。」

「…私も大丈夫。」

2人は少し考えたが直ぐに頷いた。

「交渉成立だ。俺とゼストで母親の元に行く。ルーテシアはここにいてくれ。」

「なぜだ？」

「もしもの時の為に監視させてもらう。構わないだろう？」

「…いいだろう。」

ゼストの返事を聞くとシルバは直ぐにモニターを開いた。

「聞こえるか？はやて。」

「なんやシルバ？」

モニターに映ったはやての隣にはヴェロッサがいた。

「頼みごとだ。エリオを貸してほしい。」

「はあ？意味がまったく分からんのやけど…」

「後で必ず説明する。頼む。」

そう言つてシルバが頭を下げる。

「…シルバがそこまで言うんも珍しいな。分かった。了解や、そのかわり後でしっかり説明してもらうで！」

「ああ。」

通信が終わりモニターが閉じる。

「と言う訳でルーテシアは此処で待っていてくれ。」

「うん…」

「分かった。」

その後、聖王教会にも連絡を取り、混乱するエリオにルーテシアを任せシルバとゼストはスカリエッティの研究所に向かっていた。

「しかし…画像で見た時はルーテシアと同じぐらいだった気がするが…」

「ああ、本来の姿はそうだぞ。これは特殊な身体強化魔法の一種だな。」

「なるほど…着いたぞ。」

そこには熊の巣ぐらいの大きさの洞窟が存在した。

「ここか…」

「ああ…入るぞ。」

そう言うとゼストは洞窟の中に入っていった。

少し歩くと土の壁に突き当たった。

「行き止まりだが？」

「ここで合っている。」

ゼストが手のひらに魔法陣を出すと、突然壁が開き通路が現れた。

「おお！」

シルバが嬉しそうな声を上げる。

「行くぞ。」

再び歩き出したゼストの後ろにシルバがついて行く。

「…妙だな…」

「静かすぎるな…」

シルバとゼストは同時に呟く。

「破棄されたのか？」

「だとしたら、最初からメガーヌを救う気は無かったという事にな

るな…この部屋だ。」

ゼストは重そうな扉を押し開ける。

「有った…彼女がそうだ。」

「カリム。」

「はい！」

シルバはモニターを呼び出し通信を繋ぐ。

「彼女が生きているかどうか分かるか？」

「少々お待ちください…はい。弱っては居ますが生きています。」

「教会騎士団を動かすことは？」

「可能です。」

「じゃあ、今俺が居る所に頼む。」

「承知しました。」

通信が終わりモニターを閉じる。

「…生きていたのか…」

「ああ。」

「では私も生きていたのか？」

「多分な…もう一度言う。アンタの力を貸してくれないか？」

「…いいだろう。貴方に私の槍を預けよう、聖王陛下。」

「ありがとう。」

「ほんなら、さっきの子があの中の召喚士なんか？」

「ああ。レリックを埋め込まれたことによって、かなり強引に強化されていたがな。」

聖王教会の一室にてシルバ、カリム、はやて、ゼストの四人が話をしていた。

ちなみにルーテシアはエリオと一緒に治療中の母親を待合室で待っている。

「やはりレリックの回収者及びガジェットの作成者はスカリエツテ

「イなのですね？」

「はやてがゼストに問う。」

「ああ、間違いない。」

「そうですか……」

「取り敢えず三人共、聖王教会が保護した……と言つことよろしいですか？」

「いや、ルーテシアとメガーヌだけだ。」

カリムの提案にシルバが訂正を入れる。

「しかし……」

「ゼストには今はまだやることがあるらしい。」

「……分かりました。」

その後しばらく話し合いがおこなわれた。

それぞれの目的（後書き）

なのは『私が天才なのはさんだよ！ハロー！終わり！』

キャラ「今回は中の人繋がりですね。」

シルバ「本編で原作との設定の違いが出てきな…」

キャラ「そうですね…少し上げてみましょう。」

ゼスト 原作では死亡していたのを蘇生、こちらでは死亡していない。

ルーテシア&メガーヌ 近代ベルカ式から古代ベルカ式に

キャラ「と、まあこんな感じですね。」

シルバ「ちなみにエリオにルーテシアを預ける前に、俺が裏切った
ら好きにしていよいよ…と言う話し合いがあった。」

キャラ「エリオ君は人質だったの！？」

焦りの模擬戦（前書き）

なんかシルバが偉そう…

気分転換に、猿の惑星を見に行きました。シーザーがかっこいい！！
誤字を訂正しました。 11月26日

焦りの模擬戦

とある研究所にて…

「申し訳有りません、ドクター。ルーテシアとプロジェクトFの戦いが罔だとは気付かなく…」

「構わないよ。私も彼がここまで早く動くとは思っていなかったからね。」

スカリエッティはモニターに映る女性…ウーノからの報告に答えた。
「彼女達を操る餌を放置していた私にも非がある。」

そう言いながら別のモニターに映っているメガーヌの救出映像を見つめる。

「それに考え方によっては彼女にアレを渡す前で助かった。」

「しかし…彼女でなければアレの力は存分に扱えないのでは？」

「逆だよ、ウーノ。彼女だからこそ力を付け加える必要がなかったのさ。」

「なるほど…では…」

「ああ、クアットロにアレの力を強化するように伝えてくれ。」

「かしこまりました。」

「クッククック…やはり君は面白い！ぜひとも他のサンプルと共に手に入れたい物だ！」

モニターが閉じるとスカリエッティは狂気的な笑い声をあげた。

side シルバ

「ッ!？」

何か今凄い寒気が…

「どうしたの？」

「いや何でもない。で？六課に入りたいって？」

「うん。」

今回の事についての書類を書いているとルーテシアに話しかけられた。

「またいきなりだな…お母さんは良いのか？」

「目を覚ますまでまだかかると…それまで恩返しがしたいから。」

「うん…それは俺にはどうしようもないな。」

「どうして？」

「陛下って呼ばれてるけど、俺の情報は極秘だからな…決定権はまだ持っていないだ。」

「そう言うのはカリムに相談してくれ。」

「そのカリムがシルバに頼めって…」

「何故に！？教会の責任者はカリムだろ！？」

「陛下に言わずに勝手に決められないって。」

「勝手に決めてくれて良いんだけどな…」

「陛下、お茶をお持ちしました。」

「おっ！ちょうど良いところに来た。シャッハ、カリムを呼んでくれない？」

「騎士カリムですか？かしこまりました。」

side out

「大丈夫ですよ。」

「そんなあつさり決まるんなら、何で俺の所に持ってきた！」

シルバが机を叩きながら言う。

「そろそろ、こう言った仕事にも慣れていただこうと思ひまして。」

「はあ…代表者って大変なんだな。」

「はい。まあそれは良いとして、はやてに確認を取った方がいいですね。」

疲れたようにうなだれるシルバにカリムが言う。

「ああ…任せた。」

「はい。では着いて来てください。」

「うん。」

カリムがルーテシアを連れて出て行く。

シルバも一緒に出て行こうとするが…

「陛下は書類がまだ残っています。」

シャツハに捕まってしまった。

side シルバ

「腕が痛い…」

ようやく書類整理が終わり、六課の隊社に戻って来ると既に夜中になっていた。

「シルバ？戻ってきてたんだ。」

「んあ？」

突然後ろから声をかけられ振り返る。

「なんだ…スバルか…」

「何でそんな興味なさげなの…」

「疲れてるんだよ…で？こんな時間に何してるんだ？」

「えっと…」

あやしい…

「…自主練か？」

「うん。」

この様子だと止めても無駄か…

「無茶するなよ。おやすみ。」

「うん！おやすみ！」

スバルの自主練を見かけてから三日、明日からルーテシアが派遣されてくる事になっている。

「模擬戦の見学？」

「うん。今日有る予定なんだよ。」

フェイトさんが言う。

「ふうん。俺も見に行かないか…ってこと？」

「うん。どうかな？」

なんか嫌予感がするな…

「じゃあ、行かせてもらおうよ。」

「もうすぐ始まるから急いで行こ！」

そう言って駆け足で訓練所に向かった

side out

「…あ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん、シルバ…」

「私も手伝おうと思ってたんだけど…」

「今はスターズの番。」

ヴィータが簡単に説明をする。

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ってたんだけどね。」

「ああ、なのはもここんどこ訓練密度濃いからな…少し休ませねえと…」

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ？訓練メニューを作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり…」

「なのはさん、訓練中もいつも僕達のことを見ててくれるんですね？」

「ほんとに…ずっと…」

「クロスシフトだな。」

ヴィータが呟く

「クロスファイア…シュート！」

「ん？、なんか、キレがよくねえな…」

「コントロールは、いいみたいけど…」

「いや、アレは力を入れてない罠だな。」

「罠？」

「ああ、アレを見る。」

シルバがウイングロードの上のスバルを指す。

「ッ！？」

「フェイクじゃない？本物！？」

《ディバイン・シューター》

スバルは自分に向かって放たれた魔力弾を防ぎながらそのまま向かっていく。

「うおおおお！りやああああ！！！」

リボルバーナックルとラウンドシールドと激突する。

「っ…きゃああああ！！！」

なのはによつてスバルは弾き飛ばされてしまう。

「こら、スバル！ダメだよ、そんな危ない軌道！」

「すいません…でも、ちゃんと防ぎますから！」

「…？ティアナは？」

なのはは直ぐにティアナを探す。

「砲撃！？ティアナの奴が！？」

ヴィータがティアナの行動に驚く。

『特訓の成果、クロスシフトC！いくわよ、スバル！』

「おうっ！」

スバルはカートリッジをロードして突撃をかけた。

なのはもラウンドシールドで防ぎ、そのままティアナの方を向くが…

「ッ！？」

「あつちのティアさんは幻影！？」

振り絞るような声でティアナが叫ぶ。

「…少し、頭…冷やそうか…」

そう言うとなのはさんはティアナに指を向ける。

「クロスファイア…」

「わあああつー！ファントム・ブレイツ」

「シユート…」

ティアナよりも早く、桜色の魔力弾がティアを吹っ飛ばしていた。

「ティア！…ッ！？バインド！？」

「じつとして…よく見てなさい…」

いつの間にかスバルはバインドにより身動きが取れなくなっていた。なのはは意識が朦朧としているのティアナに向けて追い打ちをかけようとする。

「なのはさん！」

なのはの考えに気付いたスバルが叫び声を上げる。

そして発射された砲撃が着弾し又も爆発を起こす。

《メルゼズ・ボルテクス》

そんな中にデバイスの音声が響く。

煙が晴れると、そこにはティアナを脇に抱え大人モードで立っているシルバと、それを覆うように回転する黒いドームがあった。

「どういづつもりなの…？」

「……………」

シルバはなのはの問いを無視してティアナをウインググロードの上に下ろす。

「ちゃんと答えてよ…」

そう言うと同時に魔力弾を放つ。

「…霸王流旋衝破…」

シルバは向かってきた魔力弾を受け止め、そのまま投げ返す。

「なっ！？」

「打ち返した！？殻も壊さずに！？」

ヴィータとフェイトが驚きの声を上げる。

「チツ…一発もらったか…」

そう言ったシルバの右肩が外れ完全に力が抜けていた。

「ハッ！！」

かけ声と同時に自分の右肩を殴り直す。

「もう一回聞くよ？どういっつもりなの？」

「此方からも聞きたい…何故ティアナを殺そうとした？」

シルバは冷たい目でなのはを見る。

「殺そうと何てしてないッ！！」

「…事実俺の肩は外れた、もし今のが首に当たったたら？頭に当たったら？」

「ッ！？」

なのはが息をのみ、目に感情が戻る。

「ティアナが…頭から地面に落ちたら？」

「私は…私は…」

そのまま膝から崩れ落ちる。

「アンタは自分の考えを…思いをこいつ等に教えたか？逆にこいつ等から聞いたか？まずはそれからやり直すんだな。」

そう言うとシルバはウイングロードから飛び降り去っていった。

焦りの模擬戦（後書き）

シルバ『だが、俺の【霸王流】に、その常識は通用しねえ。』

キャラ「なのはさんに勝った…」

シルバ「いや、なのはさんデバイス使ってない上に、冷静じゃかったし…俺肩やられたし…」

キャラ「でもすごいよ!!」

シルバ「つつかさ、肩はずれたのって、殴ったぐらいで治の?」

キャラ「そこは、ほら…ご都合主義?」

シルバ「…深く考えない様にしよ…」

教導の意味（前書き）

はーりやほーれうまうー！

……… お気に入りが100を越えただど！？

読んでくれてる皆さん、本当にありがとうございます！！

教導の意味

「ゴキ」

「ぎゃあー！！」

六課の第2会議室に悲鳴が響き渡る。

「うるせえー！！」

「うぐっ！」

悲鳴の主…シルバはヴィータに頭を殴られつづくまる。

「まったく…外れた肩を殴って直すなんて…何を考えてるの？」

シャルマルが聞く。

「いや…前にヴァイスが一度でいいからそう言うのやってみたい、とか言ってたから普通なのかと思って…」

「…」

その答えを聞いた瞬間、ヴァイスの運命が決まった。

「ともかく暫くは動かしちゃダメよ。」

「りょーかい。」

シルバの返事を聞くとシャルマルは去って行った。

「シルバ、オマエは何モンだ？」

シャルマルが居なくなっただのを見計らってヴィータが聞く。

「…何がだ？」

「とぼけんなよ。さっきオマエが使った技…アレは古代ベルカエンシェント・ベルカの技術だ。」

「だから聖王教会に居るんだろ？」

「…虹彩異色。古代ベルカにおいて強大な力を持つ王家と血の繋が
りがある証。」

「…」

「だが、緑と青の虹彩異色なんて聞いたことがねえ…もう一度聞く。
オマエは何モンだ？」

「…はあ。そろそろ限界か…」

シルバが諦めたように言う。

「あの〜」

「「うん？」」

突然割り込んできた声に2人が振り向くと第2会議室の入り口にスバルが立っていた。

「えっと…なのはさんがティアとお二人を呼ん来いって…」

シルバ達がスバルについて行くとそこには既に六課の主要メンバーがそろっていた。

「んで？何？」

「うん…みんなに私の教導の意味を知ってもらおうと思って。なのはがフォワード達の方を見ながら言う。」

「…良いのか？」

「あたしが代わりに話してやろうか？」

シグナムとヴィータが聞く。

「ううん…これは私が話さなきゃいけないの。」

なのははフォワード陣を見回してから話し始めた。

「昔ある所に普通の女の子が居たの。」

なのはの合図でシャーリーはモニターを表示する。

その女の子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかったの。

友達と一緒に学校に行って、家族と一緒に幸せに暮らして…そういう普通の人生を送るはずだったの。

でもある時、不思議な出会いをしたの。

魔法学校に行ったことも無いし、特別なスキルがあった訳でもない

…偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかった小さい女の子が…魔法と出会ってたった数か月で、激しい戦いを何回もしたの。

「これ…」

「フェイトさん？」

フェイトちゃん…その当時は家庭関係が特別でね。あるロストログアを巡って対峙してたの。

この時の事件の中心人物はフェイトちゃんのお母さんの名前からブレシア・テストロッサ事件、又はジュエルシード事件と呼ばれているの。

「集束砲！？こんな大きな！？」

「9歳の女の子が！？」

「ただでさえ大威力砲撃は体に酷い負担がかかるのに…」

その後も休む暇もなく戦いが起こった…

はやてちゃんの持つ夜天の書による、闇の書事件。

「夜天の書…？」

ヴィータちゃんとの戦いでボロ負けしちゃった女の子が選んだは、当時安全性が危うかったカードリッジシステムをレイジングハートに組み込むこと…自分の体への負担を無視して限界以上の力を引き出すフルドライブ。

誰かを救うため、自分の想いを通すための無茶を女の子は続けた…でも、そんなことを繰り返して、体に負担が生じないはずがなかった…

事故が起きたのは、入局二年目の冬…異世界での捜査任務での帰り。ヴィータちゃんや部隊の仲間と一緒に出掛けた場所で、不意に現れた未確認体…

いつもの女の子なら問題なく倒せるはずの相手だった…

ただど溜まっていた疲労、続けてきた無茶がの動きを少しだけ鈍らせちゃったの。その結果が…これ…

「……っ！」「……」

「…過ぎたる炎は我が身を焼く、か…」

下手をしたら二度と飛べなくなるかもしれない…大きな怪我を負っちゃった…

そんな無茶な女の子が私…高町なのは。

なのはが語り終わっても、フォワード達は口を開くことが出来なかった。

「無茶をしても、命を賭けなければならぬ戦いは確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面やあの模擬戦は、自分の…仲間の命を賭けても撃たなければならぬ物だったのか？」

「……………」

「なのはさん、皆が無茶しないように…本当に丁寧に、一生懸命に考えてくれてるんだよ…？」

「もっとも…私もシルバに言われるまで、思いを伝えるって事を忘れちゃてたし…その所為でティアナを追い込むことになったちゃったんだよね。ごめんね？」

「そっそんな…私が悪いのに…」

「うゝん…ティアナ、今から少し歩こうか。」

そう言うとなのははティアナを連れて外に出て行った。

ロングアーチスタッフは持ち場に戻り、フォワード陣はティアナ達を追いかけていき、ロビーには八神家となにやら考え込んでいるシルバだけになった。

「思い出した…！」

「何だ？突然。」

突然声を上げたシルバにヴィータが聞く。

「【旅する魔導書】だ！！いやゝ分かってすっきりしたゝ」

「っ！オマエ…その名前を何処で？」

嬉しそうに言うシルバを守護騎士達が睨みつける。

「え？何で？」

睨まれている理由が分からずシルバは困惑する。

「はあくみんな睨んだりしたらあかんよ。」

はやてがため息を吐きながら仲裁に入る。

「しかし、主はやて！」

「シルバがしつかり説明しい。」

「何を？」

「その名前を知ってる訳や。今回は自分の責任や。」

「…またシャツハに怒られる気が…」

「主はやて…話が見えないのですが…」

2人のやり取り見てを守護騎士達が困惑する。

「シルバ、もうあきらめえ。」

「分かりましたよ。はあくまず俺の正体から話す必要があるな。」

シルバは一息おき、指輪を外して幻覚を解き黒髪から金髪へと模倣す。

そして虹色の魔力弾を掌に作り出す。

「俺は『聖王女』オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと『霸王』クラウス・

G・S・イングヴァルトの隠し子…『聖王』シルバ・ゼーゲブレヒトだ。」

「……なっ！？」「…」

シルバの名前を聞き守護騎士達が驚きの声を上げた。

教導の意味（後書き）

はやて『逃げるのか？そうやって逃げ続けるのか？そしてヒーローが現れるのを待つか？ そいつが代わりに戦ってくれるのか？ そんな奴はどこにもいないぜ、シルバ。 いや、うまうー！』

シルバ「意味わからんし、逃げてねーし！別にシャツハなんて怖くねーし！！」

キャロ「そんなことより、今回はなのはさんの語りが入りましたね。」

シルバ「それにまた俺の正体が…」

キャロ「作者は髪の色変える指輪をしてる設定忘れてて、今までの読み返して気付いたらしいね。」

にしても、どんどんバレるね…」

シルバ「まあヴィヴィオが出たら六課みんなにバラす予定らしいし。守護騎士達は少し早い程度だよ。」

キャロ「そう言えば…何でシルバ君は夜天の書を知ってたの？」

シルバ「そこら辺は次回…もしくは次々回明かされると思う。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2703w/>

リリカルなのは 黒い月の聖王

2011年12月1日22時47分発行